

平成 29 年度
出雲市文化財調査報告書

いざもおおやしろけいだいいせき
出雲大社境内遺跡 2

2018 年 3 月
出雲市教育委員会

序

出雲大社では、60年ぶりとなる「平成の大遷宮」が平成25年（2013）に執り行われました。

その事業の一環として、宗教法人出雲大社では、庁舎の建て替え工事が計画されました。出雲市教育委員会では、境内全域が出雲大社境内遺跡にあたることから、埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本書では、平成28年（2016）度と平成29年（2017）度に実施した、庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を報告します。本書にまとめた成果が、地域の歴史と文化財保護に対する理解と関心を高めるための一助となれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、格別のご配慮をいただきました宗教法人出雲大社に深く感謝申しあげます。また、多大なるご理解とご協力を賜りました関係者の皆様をはじめ、各方面の方々に対し心からお礼申しあげます。

平成30年（2018）3月

出雲市教育委員会

教育長 樋野信幸

例　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が宗教法人出雲大社の依頼を受けて、平成 28 年（2016）度から 29 年（2017）度に実施した、出雲大社境内遺跡における廃舍建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。

2. 発掘調査は下記の調査地、期間で実施した。

調査地　島根県出雲市大社町杵築東 195 番地　出雲大社境内

調査期間　平成 28 年度　平成 28 年 10 月 21 日～平成 29 年 3 月 31 日

平成 29 年度　平成 29 年 4 月 1 日～平成 29 年 5 月 31 日

3. 調査は次の体制で行った。

平成 28 年度（現地調査）

調査主体　出雲市教育委員会（実施　出雲市市民文化部文化財課）

事務局　花谷 浩（出雲市市民文化部学芸調整官）、佐藤隆夫（文化財課文化財課長）、

宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財 1 係長）

調査員　原 俊二（同　埋蔵文化財 2 係長）、石原 啓（同　埋蔵文化財 1 係主任）、

江角 健（同　埋蔵文化財 2 係主任）、佐々木歩美（同　埋蔵文化財 2 係主任）

調査補助員　永見 翼・樋野千晴（同　臨時職員）

発掘調査作業員　大輝正人、金森光雄、星野篤史、渡部和憲

調査指導　椿 真治（島根県教育庁文化財課調整監）、深田 浩（島根県教育庁文化財課主任幹）、

守岡利栄（島根県教育庁文化財課企画員）、鳥谷芳雄（島根県古代出雲歴史博物館専門学芸員）、

学芸情報課長）、松尾充晶（島根県古代出雲歴史博物館専門学芸員）

平成 29 年度（現地調査・整理作業・報告書作成）

調査主体　出雲市教育委員会（実施　出雲市市民文化部文化財課）

事務局　佐藤隆夫（文化財課文化財課長）、宍道年弘（同　課長補佐兼埋蔵文化財 1 係長）

調査員　原 俊二（同　埋蔵文化財 2 係長）、石原 啓（同　埋蔵文化財 1 係主任）、

江角 健（同　埋蔵文化財 2 係主任）、佐々木歩美（同　埋蔵文化財 2 係主任

～ 6 月 31 日）

調査補助員　永見 翼、小松原智明、加藤章三、川瀬 優（同　臨時職員）

発掘調査作業員　伊藤 伸、大輝正人、岡田光司、奥田利晃、金森光雄、昌子守男、樋野千晴、

星野篤史、渡部和憲

室内整理作業員　吹野初子、荒木恵理子、前島浩子

調査指導　大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課特任講師）、松本岩雄（島根県立八雲立つ楓土記の丘所長）、椿 真治（島根県教育庁文化

財課調整監）、人見麻生（島根県教育庁文化財課主任主事）、廣江耕史（島根県古代

文化センター長）、松尾充晶（島根県古代文化センター専門研究員）、守岡正司（島

根県教育厅埋蔵文化財調査センター調査第2課長), 深田 浩(島根県教育厅埋蔵文化財調査センター主幹), 岡 宏三(島根県古代出雲歴史博物館専門学芸員),

目次謹一(島根県古代出雲歴史博物館専門学芸員), 澤田正明(島根県立古代出雲歴史博物館主任学芸員), 烏谷芳雄(島根県古代出雲歴史博物館主任学芸員),

花谷 浩(出雲弥生の森博物館館長), 中山玄貴(出雲市文化財課史料調査専門研究員)

4. 調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々及び諸機関から多大なご指導、ご教示、ご協力をいたいたいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略、順不同)。

宗教法人出雲大社、島根県教育厅文化財課、島根県古代出雲歴史博物館、株式会社みずほ設計、

株式会社中筋組

千家和比古(出雲大社権宮司)、北島建孝(出雲国造)

5. 発掘現場の管理等については、発掘調査補助業務として、株式会社中筋組に委託した。

6. 発掘調査の記録は、遺構の平面図作成や遺物取上げ等には、株式会社 CUBIC の遺構調査システム「遺構くん」を用いた。

また、石組み遺構 SX620 の図化にあたり、オルソ画像の作成を TDM テックに委託した。

7. 本書で用いた測地系は、世界測地系第III系であり、方位は座標北を示す。標高は海拔高を示す。

なお、今回の調査で使用した座標値と、平成 19 年(2007)度から平成 27 年(2015)度までの調査で使用した座標値とが一致しないことが判明した。これを確認した場所は、SD609 の西面の既調査箇所で、現地保存されている石組である。

そのため、今回の座標値を、過去の数値と合致させるため、トーワエンジニアリング株式会社に測量データの修正作業を委託した。修正は、X 軸は東に -0.383, Y 軸は北に 0.543 である。X 軸については、-0.0047 の差があったが、今回は修正していない。

8. 調査にあたって実施した自然科学分析は、花粉分析・AMS 年代測定・樹種同定であり、いずれも文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。その成果は、第 4 章に掲載した。

9. 本文中に使用した遺構の略号は、『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編一』(2010 年) 同成社による。

SD : 構 SG : 池 SP : ピット SX : その他遺構

10. 遺構番号については、現地調査時の番号を変更した。今回の調査地は、『平成 28 年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡』(2017 年 3 月)において、瑞垣南側調査区と呼称している。この調査区の遺構番号は 600 番台で整理されていることから、本報告においても、これを踏襲することとしたが、調査地が広い範囲として限られていることから、分かりやすい数字として 620 番からの番号をあてることとした。

遺構の旧番号→遺構の新番号 SX01 → SX620 SX02 → SX621 SD01 → SD622

SD02 → SD623 SX03 → SX624 SG01 → SG625 SP01 → SP626

11. 本遺跡の出土品は宗教法人出雲大社、図面・写真類は出雲市教育委員会で保管している。

12. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影したが、遺物の祈祷札(全形写真)については、坂本豊治(出雲市文化財課主任)が撮影した。

13. 本書の作成は、穴道の指導のもと、原・石原を中心とした調査員の協議に基づいて行い、原が編集した。

目 次

| | |
|----------------|-----------|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | (原) 1 |
| 第2節 調査の経過 | (原) 1 |
| 第3節 過去の調査の概要 | (佐々木・原) 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | (佐々木・原) 7 |
| 第1節 遺跡の位置 | 7 |
| 第2節 歴史的環境 | 7 |
| 第3章 調査の成果 | (原) 10 |
| 第1節 調査の方法 | 10 |
| 第2節 トレンチ調査の概要 | 12 |
| 第3節 中央調査区の調査概要 | 23 |
| 第4節 東調査区の調査概要 | 36 |
| 第4章 自然科学分析 | (渡辺) 47 |
| 第1節 花粉分析 | 47 |
| 第2節 AMS 年代測定 | 53 |
| 第3節 樹種同定 | 55 |
| 第5章 まとめ | (原) 58 |

挿 図 目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| 第1図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所1 | 3 |
| 第2図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所2 | 4 |
| 第3図 出雲大社の位置図 | 7 |
| 第4図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡 | 8 |
| 第5図 旧庄内位置図 | 10 |
| 第6図 調査地平面図 | 11 |
| 第7図 調査地南北ライン・東西ライン土層図 | 14 |
| 第8図 調査地南北ライン・東西ライン土層図2 | 15 |
| 第9図 トレンチ土層図1（1～3トレンチ） | 16 |
| 第10図 トレンチ土層図2（4～7トレンチ） | 17 |
| 第11図 SX624 道構実測図 | 18 |
| 第12図 第1・2・5トレンチ出土遺物実測図 | 19 |
| 第13図 SX620 道構実測図1 | 21 |
| 第14図 SX620 道構実測図2 | 22 |
| 第15図 SX620 道構東西ベルト土層図 | 23 |
| 第16図 SX620 土出土遺物実測図1（土器1） | 24 |
| 第17図 SX620 土出土遺物実測図2（土器2） | 25 |
| 第18図 SX620 土出土遺物実測図3（木製品1） | 27 |
| 第19図 SX620 土出土遺物実測図4（木製品2） | 28 |
| 第20図 SX620 土出土遺物実測図5（木製品3） | 29 |
| 第21図 SX620 土出土遺物実測図6（木製品4） | 30 |
| 第22図 SX620 土出土遺物実測図7（木製品5） | 31 |
| 第23図 SX620 土出土遺物拓影図1（錢貨1） | 32 |
| 第24図 SX620 土出土遺物拓影図2（錢貨2） | 33 |
| 第25図 SP626 土出土遺物実測図1（木柱） | 34 |
| 第26図 SX621 道構実測図 | 35 |
| 第27図 中央調査区道構外出土遺物実測図 | 36 |
| 第28図 SD609 道構実測図 | 38 |
| 第29図 SG625 道構実測図1 | 39 |
| 第30図 SG625 道構実測図2・埋土南北ベルト土層図 | 40 |
| 第31図 SG625 出土遺物実測図 | 41 |
| 第32図 トレンチ配置図（試料採取地点） | 47 |
| 第33図 試料採取層位（位置） | 48 |
| 第34図 1トレンチの花粉ダイアグラム | 49 |
| 第35図 2トレンチの花粉ダイアグラム | 50 |
| 第36図 5トレンチの花粉ダイアグラム | 50 |
| 第37図 トレンチ配置図（試料採取地点） | 53 |
| 第38図 試料採取層準 | 53 |
| 第39図 歴年較正年代の分布 | 54 |
| 第40図 「Sequential」閾数を用いた再計算値 | 54 |
| 第41図 「Sequential」閾数を用いた再計算値の分布 | 54 |
| 第42図 トレンチ配置図（試料採取地点） | 55 |
| 第43図 試料採取層準 | 55 |
| 第44図 瑞垣南側地区における中世後半期の建物位置 推定図 | 59 |
| 第45図 調査地東西断面図1 | 60 |
| 第46図 調査地東西断面図2 | 61 |

挿 表 目 次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1表 過去の主な調査一覧 | 2 |
| 第2表 出土遺物観察表1（土器・土製品・石製品） | 43 |
| 第3表 出土遺物観察表2（木製品） | 44 |
| 第4表 出土遺物観察表3（銭貨） | 45 |
| 第5表 陶磁器 集計表 | 46 |
| 第6表 微化石概査結果 | 48 |
| 第7表 花粉組成表 | 51 |
| 第8表 AMS 年代測定結果 | 54 |

図 版 目 次

| | |
|---------------------------------|--|
| 図版1 調査前全景・第1トレンチの調査 | |
| 図版2 第2・4トレンチの調査 | |
| 図版3 第5トレンチの調査 | |
| 図版4 石組み道構 SX620・石積み道構 SX621 の調査 | |
| 図版5 石組み道構 SX620 の調査 | |
| 図版6 石組み道構 SX620 の調査 | |
| 図版7 石組み道構 SX620 の調査 | |
| 図版8 石組み道構 SX620 の調査 | |
| 図版9 石組み道構 SX620・石積み道構 SX621 の調査 | |
| 図版10 池 SG625 の調査 | |
| 図版11 石組み水路 SD609 の調査 | |
| 図版12 池 SG625 の調査 | |
| 図版13 池 SG625 の調査 | |
| 図版14 池 SG625 の調査 | |
| 図版15 池 SG625 の調査・調査後全景 | |
| 図版16 出土遺物1 | |

本 文 写 真

| | |
|-----------------------------|----|
| 写真1 樹種同定顕微鏡写真 | 57 |
| 写真2 紙本着色絵大社近隣絵図（境内部分）（北島家蔵） | 59 |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

出雲大社平成の大遷宮は、宗教法人出雲大社によって平成20年（2008）度から実施されている事業である。その事業の一環として、平成28年（2016）度から庁舎建替えが進められている。庁舎が立地する境内は、出雲大社境内遺跡内であることから、出雲市教育委員会は文化財保護法に基づき、発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査の経過

境内南西部に建つ、昭和38年（1963）に建てられたコンクリート造りの庁舎は、昭和28年（1953）の火災で焼失した木造の庁舎に替わって建てられた建物である。庁舎解体工事は、平成28年（2016）10月から同年12月まで行われ、工事施工時に随時立会を行い埋蔵文化財の有無を確認した。新庁舎は、旧庁舎と同位置に建設され、概ね旧庁舎の解体範囲、およびその深度内におさまるよう設計された。調査の対象範囲は、旧庁舎に関しては基礎工事の影響が及んでいないと判断される場所（中央調査区）と、新たに掘削が行われる場所（東調査区）であり、平成29年（2017）3月から5月まで調査を行った。発見された遺構については、島根県教育委員会の指導を受け、事業者及び施工者と協議し、可能な限り設計変更に努めていただき、保存を目指した。やむを得ず一部は記録保存としたが、大部分は現状保存とした。

第3節 過去の調査の概要

出雲大社境内遺跡では、これまでに十数回にわたり埋蔵文化財発掘調査が行われている。既に明治時代の終わり頃には、境内からの土器や石器の出土が確認されていた（花谷2012・2013）が、考古学的観点から遺跡として認識されることになったのは、昭和18年（1943）の仮殿建設の際に遺物が収集されたことによる（大社町史編集委員会2002）。昭和28年（1953）に拝殿等が火災で焼失したことを利用機に実施された昭和29・30年（1954・1955）の本殿防災施設工事の際に、本遺跡最初の発掘調査が行われている。以降、事業の実施に伴い発掘調査が行われており、その概要は第1表、第1・2図のとおりである。

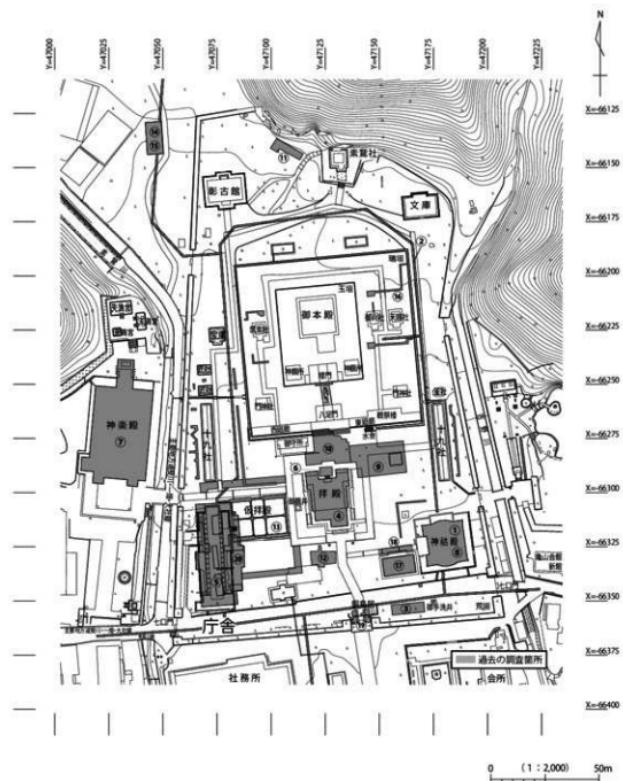
本報告の前に、これまでの発掘調査成果の概要を整理しておく。

1. 防火水道用鉄管理設工事に伴う発掘調査（第1表・第1図②③）

昭和29年（1954）に、防火水道用の鉄管理設工事に伴う調査、昭和30年（1955）に、銅鳥居東方約20m地点の地下貯水タンク構築のための調査が実施された。鉄管理設工事では、荒垣内の各所から広く遺物が出土し、境内全体が遺跡であることが認識された。西南七口門東側では、木の鳥居の柱根を検出し、根固めのために埋められた可能性のある礫が、まとまって出土した。東十九社西側、

第1表 過去の主な調査一覧

| 調査位置 | 工事・調査の名称 | 調査年 | 概要 |
|------|---------------------------|--|--|
| ① | 仮拌殿建設工事 | 昭和 18 年（1943） | 遺物採取（弥生後期～中世土師器） |
| ② | 本殿防災施設工事 (鉄管埋設に伴う) | 昭和 29 年（1954）6 月 | 遺物採取（縄文晚期～中世土師器）、鳥居基部の大柱痕 |
| ③ | 本殿防災施設工事 (地下貯水タンク設置) | 昭和 30 年（1955）6 月 | 遺物採取（縄文晚期～中世土師器） |
| ④ | 新拌殿建設工事 | 昭和 32 年（1957）9 月～ 昭和 33 年（1958）1 月 | 縄文晚期～近世の土器・陶磁器、中世の掘立柱 柱根、本殿遺構、天正度・慶長度（近世初期）の 基礎建物・遺跡 |
| ⑤ | 庁舎建設 | 昭和 37 年（1962） | 遺物採取（弥生中期～中近世の土師器） |
| ⑥ | 拌殿北地下室増設工事 | 昭和 43 年（1968） | 遺物採取（縄文晚期～中近世の土師器） |
| ⑦ | 神楽殿建設 | 昭和 54 年（1979） | 遺物採取 |
| ⑧ | 神祐殿建設 | 昭和 55 年（1980） | 遺物採取 |
| ⑨ | 地下祭礼準備室建設 | 平成 11 年（1999）9 月～ 平成 12 年（2000）3 月 | 弥生後期～近世土器・陶磁器、古墳時代の玉類、 中世の埴列、宝治度（鎌倉時代）の本殿遺構 |
| ⑩ | 内容確認調査（八足門前） | 平成 12 年（2000）4 月～ 平成 13 年（2001）11 月 | 平安時代～近世土器・陶磁器、宝治度（鎌倉時代） の本殿遺構、慶長度（近世初期）の本殿遺構ほか |
| ⑪ | 内容確認調査（彰古館北） | 平成 13 年（2001）12 月～ 平成 14 年（2002）3 月 | 縄文晚期・中世～近世の土器・陶磁器、中世の 遺構ほか |
| ⑫ | 内容確認調査（拌殿南） | 平成 14 年（2002）6 月～ 平成 14 年（2002）12 月 | 弥生中期～近世の土器・陶磁器、慶長度（近世初期） の御供所ほか |
| ⑬ | 仮拌殿建設工事 | 平成 19 年（2007）2 月 | 延享度庁舎の雨落溝 |
| ⑭ | 市内遺跡調査（奥谷） | 平成 20 年（2008）11 月～ 平成 21 年（2009）2 月 | 中世土師器、近世の陶磁器 |
| ⑮ | 本殿ほか 22 棟防災施設工事 (奥谷遺跡) | 平成 21 年（2009）6 月～ 9 月 | 中世～近世の土師器、陶磁器 |
| ⑯ | 本殿ほか 22 棟防災施設工事 (境内) | 平成 22 年（2010）6 月～ 平成 23 年（2011）1 月 | 弥生時代～近世土師器・陶磁器、中世の瓦敷き 遺構ほか |
| ⑰ | 美術工芸品収蔵庫建設工事 | 平成 25 年（2013）7 月～ 10 月 | 文化度の建物跡、溝状遺構、土坑 |
| ⑱ | 渡り廊下建設工事 | 平成 26 年（2014）7 月 | 文化度の溝状遺構、土坑 |
| ⑲ | 銅鳥居修理 | 平成 27 年（2015）2 月～ 9 月 | 銅鳥居の基礎構造 中世～近世の土師器、陶磁器、古鏡 |
| ⑳ | 環境保全事業・排水対策工事 ほか | 平成 25 年（2013）6 月～ 平成 28 年（2016）2 月 | 慶長度以前と推定される石垣、寛文度の東面瑞 垣、延享度の庁舎跡ほか |
| ㉑ | 庁舎替え工事 | 平成 28 年（2016）10 月～ 平成 29 年（2017）5 月 | 慶長から寛文までの間に起きた洪水砂層に複わ れた、石組み遺構・池状遺構ほか |

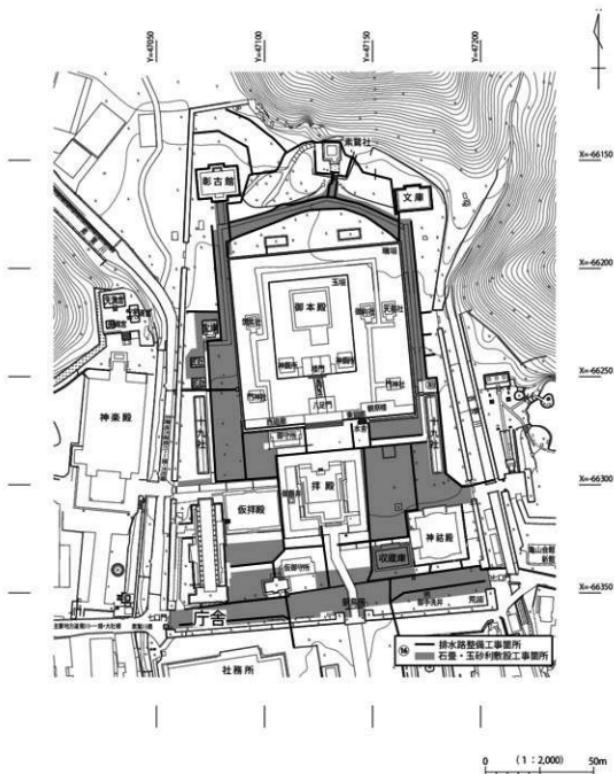


第1図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所 1

素鷦社南方では石列、境内南方では南北に延びる中世以降の溝跡3条が確認されている。地下貯水タンク建設に伴う調査では、縄文時代晚期から平安・鎌倉時代（12～13世紀）の遺物が出土している（出雲大社 1956）。

2. 拝殿建設工事に伴う発掘調査（第1表・第1図④）

昭和32年(1957)、33年(1958)に、拝殿再建工事に伴う調査が行われ、延享度の拝殿跡、天正～慶長度の溝跡・礎石群、14～16世紀の本殿に伴う柱根が確認されている。出土遺物は、縄文時代晚期から現代に至るまでほぼ連続しているが、弥生時代後期から古墳時代前期、江戸時代前期(17世紀前半)の遺物が多いことが指摘されている(景山ほか2004)。



第2図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所 2

3. 庁舎建設工事・拝殿北地下室増設工事・神楽殿建設工事及び神祐殿建設工事に伴う調査（第1表・第1図⑤⑥⑦⑧）

昭和37年（1962）の庁舎建設工事では、工事立会によって弥生時代中期から中世の遺物が確認されている。また、昭和43年（1968）の拝殿北地下室増設工事では、弥生時代前期から中世の遺物が出土している。昭和54年（1979）の神楽殿建設工事、昭和55年（1980）の神祐殿建設工事の際にも遺物が採取されている（大社町史編集委員会 2002）。

4. 地下祭礼準備室建設に伴う発掘調査（第1表・第1図⑨）

平成11年（1999）度に、祭礼準備のための地下室建設に伴い発掘調査が実施された。大型本殿遺

構に関連する礫集中遺構を検出したほか、室町・戦国時代頃の本殿遺構及び玉垣を確認した。また、慶長度の本殿階段跡を確認している（景山ほか 2004）。

5. 国庫補助事業内容確認調査（第1表・第1図⑩⑪⑫）

平成 12～14 年（2000～2002）、内容確認調査として、八足門前、彰古館北、拝殿南の調査を行った（景山ほか 2004）。

（1）八足門前の調査（第1表・第1図⑩） 地下祭礼準備室建設に伴う調査を引き続き行ったところ、宝治度本殿の3本束ねの柱根（宇豆柱）が見つかった。さらに調査区を拡張した結果、心御柱ほか柱根を3か所で確認した。また、寛文度の拝殿に伴う柱跡1か所と慶長度本殿跡と考えられる柱跡を4か所確認した。

（2）彰古館北の調査（第1表・第1図⑪） 本殿北側・彰古館北東部を調査したところ、縄文時代晚期の遺物が出土した。土層堆積状況から、境内北部域は中世以降に境内面として利用されたことが分かった。

（3）拝殿南の調査（第1表・第1図⑫） 拝殿南を調査したところ、慶長度の建物跡と考えられる基壇と柱跡を確認した。また、古墳時代終末期～奈良時代（7～8世紀）に機能した流路1条を確認した。

6. 仮拝殿建設工事に伴う発掘調査（第1表・第1図⑬）

平成 19 年（2007）2 月、出雲大社平成の大遷宮による仮拝殿建設工事に伴う発掘調査を実施した。建物の基礎部分について発掘調査したところ、溝（石列）を確認した。昭和 28 年の火災で焼失した延享度建築の庁舎に伴う雨落溝の一部と考えられる（曾田 2013）。

7. 国宝出雲大社本殿ほか 22 棟防災施設工事に伴う発掘調査（第1表・第1図⑭⑯）

平成 21～23 年（2009～2011）度に、出雲大社平成の大遷宮により実施された防災施設工事に伴い、本殿北西の奥谷遺跡（荒垣外）及び出雲大社境内遺跡（瑞垣内を含む荒垣内）の調査を行った（曾田 2013）。

（1）奥谷遺跡（荒垣外）の調査（第1表・第1図⑭⑯） 荒垣北西部に設置される防火水槽設置予定地を試掘調査したところ、奥谷遺跡の存在を確認した。本調査により、遺構は確認できなかつたが、13世紀頃の遺物をはじめ、近世を中心とするまでの土師器・陶磁器が出土した。

（2）出雲大社境内遺跡（荒垣内）の調査（第1表・第1図⑯） 瑞垣内で初めて発掘調査を行った。送水管が敷設される4か所、63mを調査し、寛文度造成土中に溝状の断面を確認し、寛文度造営の瑞垣の位置を想定できた。瑞垣外では、送水管敷設に伴う調査で、主に近世の土師器・陶磁器が出土した。末社十九社本殿（西）の東側では、室町時代の瓦が敷かれた瓦敷き遺構を検出したほか、御手洗井近くの表土下 60cm から、焼土とともに鉄滓が出土した。

8. 出雲大社美術工芸品収蔵庫建設工事に伴う発掘調査（第1表・第1図⑰）

平成 25 年（2013），神祐殿西側に美術工芸品収蔵庫が建設されるのに伴い、発掘調査を実施した。文化 6 年（1809）の遷宮に際し建てられた仮設建物の可能性がある建物跡 1 基と溝状遺構 1 条、土坑数十穴を確認した。

9. 出雲大社収蔵庫の渡り廊下建設に伴う発掘調査（第1表・第1図）

平成 26 年（2014），神社殿西側に渡り廊下が建設されるのに伴い，発掘調査を実施した。南に隣接する美術工芸品収蔵庫建設工事に伴う発掘調査の調査区で確認した溝状遺構の続きが見つかった。

10. 重文出雲大社銅鳥居修理に伴う掘削に係る発掘調査（第1表・第1図）

平成 27 年（2015），「国宝出雲大社本殿ほか 22 棟保存修理事業」により，南に傾いていた銅鳥居が修理された。地下構造の把握と傾きの原因調査のため発掘調査を行ったところ，銅鳥居は礎石建ちで，根巻石，据石，飼石により堅固にえらされていることがわかった。しかし，銅鳥居周辺から樹根が侵入したことにより，堅固な石組がゆるみ，柱が傾いた可能性が考えられた。

11. 国宝出雲大社本殿ほか 22 棟建造物環境保全事業に伴う発掘調査，出雲大社境内他排水対策工事に伴う発掘調査，出雲大社石畳・玉砂利敷設工事に伴う発掘調査（第1表・第2図）

平成 25～27 年（2013～2015）度に，出雲大社平成の大遷宮により実施された環境保全事業，排水対策工事，石畳・玉砂利敷設工事に伴い，出雲大社境内遺跡の調査を行った。

調査面積は狭小で，出土遺物は少ないながらも，慶長度以前と推定される石垣，寛文度の東面瑞垣，延享度の序舎跡などの遺構が見つかった（佐々木 2017）。

これまでの調査により，境内の広範囲から遺物が出土し，出雲大社境内遺跡は，縄文時代晚期から現代まで続く複合遺跡であることがわかっている。調査の多くが，境内における工事に伴うものであり，遺構を部分的にしか調査することができず，全体像の把握が難しいが，境内利用の変遷の解明につながっている。

【参考文献】

- 出雲大社 1956 「出雲大社國寶防災施設工事報告書」
- 出雲大社 1986 「拝殿地下調査報告書」
- 景山真二ほか 2004 「出雲大社境内遺跡」 大社町教育委員会
- 佐々木歩美 2017 『平成 28 年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡』 出雲市の文化財報告 36 出雲市教育委員会
- 曾田辰雄 2013 「第Ⅲ部 発掘調査」『国宝出雲大社本殿ほか 22 棟防災施設工事報告書』 宗教法人出雲大社
- 大社町史編集委員会 2002 『大社町史』 史料編（民俗・考古史料） 大社町
- 花谷浩 2012 「瓦礫陶拾遺 その2—「長谷川コレクション」の全容Ⅰ—」『出雲弥生の森博物館研究紀要』 第2 集 出雲弥生の森博物館
- 花谷浩 2013 「瓦礫陶拾遺 その3—「長谷川コレクション」の全容Ⅱ—」『出雲弥生の森博物館研究紀要』 第3 集 出雲弥生の森博物館

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

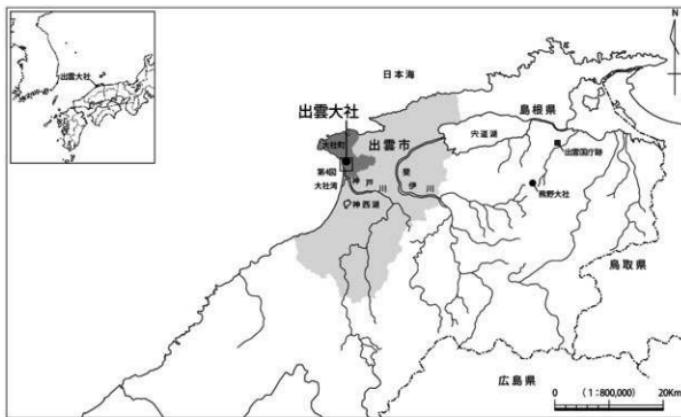
出雲大社境内遺跡は、島根県出雲市大社町杵築東に所在する。遺跡が所在する出雲市は、島根県東部に位置し、北は島根半島、南は中国山地に囲まれ、東は宍道湖に、西は日本海に面している。このうち出雲市街地の北西部にあたる大社町は、島根半島の西端部の山地とその南に接する出雲平野の北西部からなり、平野部の海岸沿いには南北に砂丘が延びる。(第3・4図)

出雲大社境内遺跡は、島根半島を形成する北山山麓に鎮座する出雲大社の境内に位置し、荒垣で囲まれた境内域が範囲である。北に八雲山、東に亀山、西に鶴山と三方を山に囲まれ、この山々の谷筋から南へ流れる吉野川と素鷲川の間に境内が広がっている。

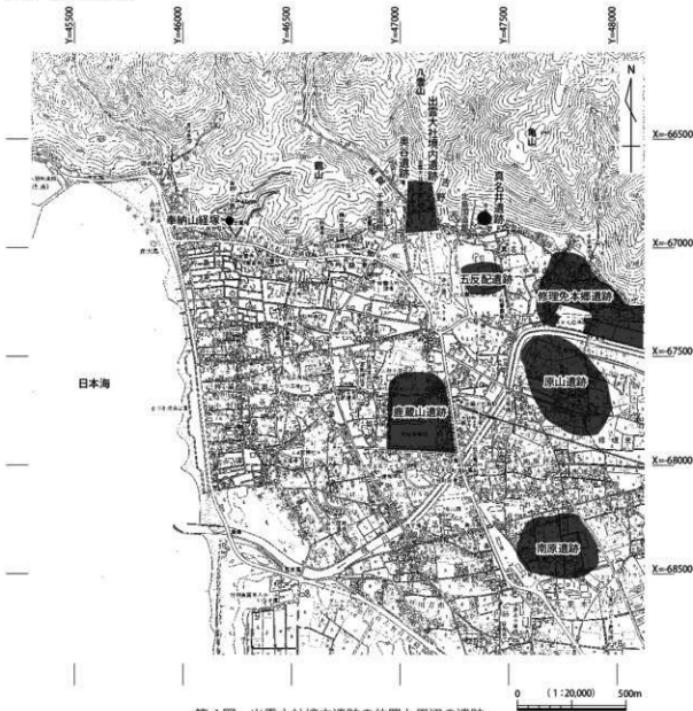
第2節 歴史的環境

出雲大社境内遺跡は、縄文時代晚期から現代まで連続する複合遺跡である。最も古い遺構は、古墳時代前期の溝で、溝内とその周辺から多量の土器と玉類が集中して出土していることが注目される。遺跡周辺には、弥生時代前期の配石墓が見つかった原山遺跡、銅戈と勾玉が出土した真名井(眞名井)境内(眞名井)遺跡、奈良三彩・緑釉陶器・墨書き土器や腰帶金具などが出土した鹿藏山遺跡などが所在する(第4図)。

出雲大社の創建に関しては、『古事記』や『日本書紀』のなかで、巨大神殿の建造について語られ



第3図 出雲大社の位置図



第4図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡

るが、具体的な年号がわかる記述としては、『日本書紀』の齊明天皇5年(659)は歳条が初出である。『出雲國風土記』では、その神殿の高さの由来や用材の採取地について記されている。当時、出雲国造の本拠地は出雲東部の意宇郡にあり、同郡には国庁が置かれ、政治・祭祀の中心となっていたが、平安時代中頃には、国造は拠点を杵築へ移し、杵築大社が祭祀の中心となる。出雲国造が天皇に奏上した「出雲國造神賀詞」から、熊野大社と杵築大社が大穴持命(大国主命)を祀っていることがわかるが、国造が杵築へ移った後の平安時代末期には、杵築大社が「國中第一の靈神」(「年月日未詳杵築大社造営遷宮旧記注進状」北島家文書)と呼ばれるようになるなか、主祭神は素戔嗚尊へと転換する(「年月日未詳〔元龜年間 1570 ~ 73頃〕飼淵寺僧某書状断簡」飼淵寺文書)。

古代における出雲大社の社殿の造営については、史料が残されておらず明確ではない。11世紀以降については、「杵築大社造営覚書」(佐草家文書、応永19年(1412))、「杵築大社旧記御遷宮次第」(飼淵寺文書、近世初め頃)などから造営の変遷をたどることができる。中世の社殿は、16丈(約48m)であったと伝えられる(「杵築大社旧記御遷宮次第」)。高層建築の根拠となっているのが、文献に残る康

平4年（1061）、天仁2年（1109）、保延7年（1141）、承安2年（1172）、嘉禄元年（1225）の社殿転倒の記録である。出雲大社境内遺跡で発見された巨大な3本束ねの柱を持つ社殿は、宝治2年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。中世において高層神殿の造営が行われたのは、宝治度造営までで、これ以降は仮殿式造営が続き、正殿式造営が再び行われるのは、寛文度造営（寛文7年（1667））からである。平安時代後期から鎌倉時代においては、杵築大社の造営は、出雲国衙から出雲国司（在京）を通して国家に造営許可の申請を行い、それをうけて国家命令が出されていたが、その命令を根拠に国衙が出雲国内から費用の一部を分担させて、造営事業を実施していた。室町時代になると、造営主体が大社神官と出雲國守護に替わるが、戦国時代には、出雲国を支配した戦国大名尼子氏が杵築大社の造営を主導し、永正16年（1519）は尼子経久、天文19年（1550）は尼子晴久が造営遷宮を行い、大日堂や三重塔を建てるなど境内の寺院様式化が図られる。続く天正8年（1580）の造営は、尼子氏を継ぎ出雲国を支配した戦国大名毛利元就の孫輝元、慶長14年（1609）の造営は、豊臣秀頼によって行われた。慶長度造営後の境内の様子が描かれた『紙本著色杵築大社近郷絵図』（北島家蔵）には、朱塗り柱の本殿を中心に、三重塔や鐘楼、大日堂などが描かれている。

一方、本願も造営事業に関わるようになる。当初、永正度の造営に際し尼子経久が臨時に置いた本願の職が、天文度以降は、尼子晴久によって常設本願の設置となり、造営事業に深く関わるようになった。その後は造営事業のみならず、大社の日常的な業務などにも関わるようになり、その状態は寛文度の造営まで続いた。

境内から仏教色が排除されるのは、寛文度造営である。幕府の財政援助を受けて、松江藩主松平直政が造営を行った。この寛文度造営では、本願を追放し、境内の仏教建築が移築・破棄された。また、宝治度造営以来の正殿式が採用され、高さ8丈（約24m）の本殿が造られ、現在の出雲大社境内の形態が整えられた。主祭神も素戔鳴尊から大国主命に復されている。

現在の本殿は、延享元年（1744）年に造営されたものである。これ以降、文化6年（1809）、明治14年（1881）、昭和28年（1953）、そして、今回の平成25年（2013）の修造遷宮を経て、今日に至る。

このように出雲大社では、長い年月の間に幾度の造営遷宮が執り行われてきた。出雲大社境内遺跡は、この造営遷宮の痕跡が複雑に重複する遺跡である。

【参考文献】

- 出雲大社社務所 2001『出雲大社山緒略記』
- 出雲弥生の森博物館編 2013『2013年特別展 もう一つの出雲神話—中世の鵠淵寺と出雲大社—』
- 景山真二ほか 2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会
- 島根県古代文化センター編 2002『島根県の歴史を語る古文書 出雲大社文書—中世杵築大社の造営・祭祀・所領—』
- 大社町史編集委員会編 1991『大社町史 上巻』大社町
- 大社町史編集委員会編 2002『大社町史 史料編（民俗・考古資料）』大社町
- 奈良文化財研究所 2003『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会

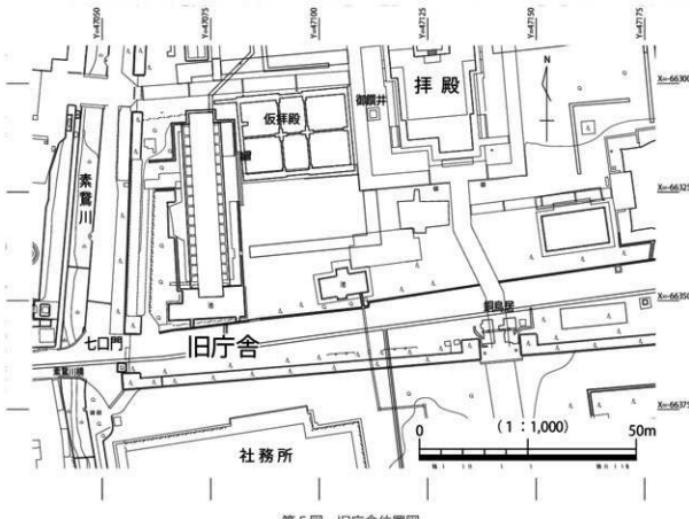
第3章 調査の成果

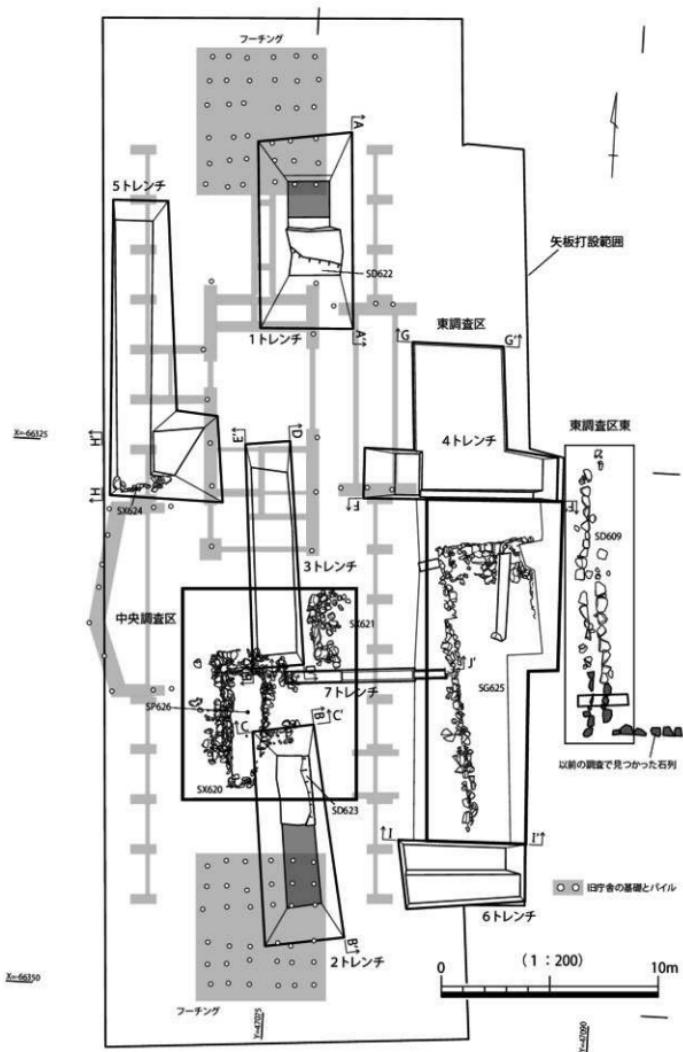
第1節 調査の方法

旧庁舎は、今から55年前の昭和38年（1963）に建築された建物である（第5図）。調査を実施するに当たり、建物の基礎やパイプなどの位置や深さ、施工方法など、当時の工事についての情報が必要であるが、これらについては、今回の新庁舎の設計を担当する設計事務所から提供を受け、それとともに調査範囲や調査方法を検討することとなった。

調査は、旧庁舎の解体工事、新庁舎の建設工事の進捗に合わせ、以下のような順序で実施した。

- 1 旧庁舎の上屋解体時と外構物・地下埋設物の撤去時の立会。
- 2 旧庁舎の基礎撤去工事時の立会。
- 3 矢板打設のための事前掘削時と矢板打設時の立会。
- 4 基礎下のパイプ位置の確認のための掘削時の立会。
- 5 調査対象地全体の遺構の残存状態や、土層堆積状況を確認するための試掘調査（1～6トレンチ）。
- 6 旧庁舎の基礎工事が及んでいない範囲（中央調査区）と、新庁舎建設のために新たに掘削が必要となる範囲（東調査区）についての本調査。及び、2つの調査区の関係を調べるためにトレンチ





第6図 調査地平面図

調査（7トレンチ）。いずれの調査も、掘削深度は、新庁舎の基礎の地中梁下端の深さ（標高6.788m）までを調査対象とした（第6図）。

これら一連の調査により、3の段階で、東調査区東において延享度造営時の庁舎の雨落ち溝（石組水路SD609）を確認した。調査の後、矢板打設場所を西側に移動し、遺構は現状保存となった。

5の段階で、6か所のトレンチ（1～6トレンチ）を設定し、調査を実施した。1・2・5トレンチで確認した溝SD622・623、石列SX624は現状保存とした。

6の段階で、トレンチ調査の成果をもとに中央調査区と東調査区で遺構を確認した。調査の後、遺構（石組み遺構SX620・石積み遺構621・池SG625）は基本、現状保存となった。

以上、庁舎建て替え工事に伴い、7箇所のトレンチと3箇所の調査区を設定し調査を実施した。

第2節 トレンチ調査の概要（第6～8図）

トレンチ調査は、調査対象地全体の遺構の残存状態や土層堆積状況を確認するため、トレンチを7箇所設定し調査を行った。

トレンチの深さは、新庁舎の工事で掘削がおよぶ基礎の深度（標高6.788m）を目安とした。

南北方向（南北ライン）は、調査対象地のほぼ中央を縦断するように1・2・3トレンチを設定した。1と2は、旧庁舎のフーチング（大型基礎）建設時の掘方確認も兼ねて、基礎底面の深さである約2.6m（標高約5.2m）まで掘削した。

東西方向（東西ライン）は、調査対象地のほぼ中央を横断するトレンチ4・5（東西ライン1）と、南側を横断するトレンチ6・7（東西ライン2）を設定した。4トレンチと5トレンチは、遺構確認や上層の広がりを確認するため、いずれのトレンチも北方向に拡張して調査を実施した。

この一連のトレンチ調査により、調査区内の大まかな層序を把握することが出来た。

調査区内の基本層序は、出雲大社境内遺跡の調査において、過去の調査成果から鍵になる層が知られている。それは、寛文度の造成土と、慶長度以降から寛文度の造成までの間に堆積した洪水砂層の2つの層である。

寛文度の造成は、寛文の遷宮に合せ盛土で地表面を嵩上げし高槻化したもので、大規模な事業であったとされるものである。そのため、この造成土の上面が寛文度の遷宮時の地表面である。

また、洪水砂層は、慶長度の遷宮以降から寛文度の造成までの間に、東の吉野川と西の素鷲川が洪水で氾濫したことにより堆積したものである。そのため、この洪水砂層が慶長度以前の遷宮時の遺構面を覆う。

南北ラインでは、造成土層は攪乱のため確認できなかったが、洪水砂層は2トレンチの3層で確認した。4・5層は中世の遺物包含層であり、その下層で古墳時代の遺物包含層が堆積する。1トレンチでは古墳時代の遺物包含層の7層を東西溝SD622が掘り込んでいる。3トレンチでは南北溝SD623の埋土下層（6～2層）で確認した。

東西ライン1では、4トレンチの1層において造成土層を確認し、2・3層において洪水砂層が堆積する。5トレンチでは、洪水砂層の標高よりも低い位置で、石列SX624を確認した。

東西ライン2では、SX620を覆う造成土を確認し、遺構内の埋土には洪水砂が堆積する。また、7トレンチのSG625の埋土と6トレンチ3層(SG625の底面に相当)も洪水砂である。

これらをまとめると、層序は基本、上から擾乱土、寛文の造成土、寛文の造成土から慶長までの洪水砂層、中世の遺物包含層、時期不明の堆積土、古墳時代の遺物包含層となる。

境内遺跡の鍵層である造成土と洪水砂層は、おむね標高7mを境に上下で堆積することが分かる。この堆積状況を、過去の調査成果と、どのように対応するか比較する。

出雲大社境内の地表面は、北から南へ緩やかに下っている。境内北側の素鷦社正面付近は標高11.0mであり、南の拝殿正面付近は標高8.0mとなる。その差、約3mの高低差となる。そのため、今回の調査場所の層序を検討する場合、標高が近い瑞垣南側調査区(佐々木2017)の南側(拝殿前)における、過去の調査成果の層序と対比することが適当と考える。

拝殿前の調査は、平成14年(2002)調査の拝殿南(景山ほか2004)と、平成27年(2015)調査の拝殿南西と拝殿南(佐々木2017)の計3回実施されている。このうち、掘削深度が標高2.3mにまでおよんだ平成14年(2002)の調査時の層序を参考とする。

層序は基本、上から1層表土(地表面の玉石の下は褐色粘質土)、2層寛文造成土(角礫を含む明褐色粘質土)、3層寛文造成土から慶長までの洪水砂層(青灰色砂層)、4~7層時期が明確でない洪水砂層(青灰色の粘質土と砂質土の互層)、8層推定宝治度遺構面(黒褐色粘質土)、9・10層(青灰色及び赤褐色粘質土)、11層古墳時代前期(黒色粘質土)の順となる。

1層上面の地表面の標高は約7.76mであり、層厚は0.32m(標高は7.44m)である。2層は寛文度の造成土であるが、この層の上面が寛文度の遺構面である。層厚は約0.42mであり、標高は7.0mである。3層は、慶長度から寛文度の造成の間に起きた洪水砂層が堆積する。層厚は約0.1~0.22mであり、標高は6.78~6.9mである。この層が慶長度の遺構面を覆う。4~7層は、洪水層であるが時期は不明である。4層の上面が慶長度の遺構面である。8層上面は、推定宝治度遺構面であり、標高6.36mである。9・10層は、洪水層である。11層は古墳時代前期の層で、この層上面で7世紀後半から8世紀前半の遺構が見つかっている。

のことから、この参考とした層序と調査区の層序を比較してみると、寛文度の造成土・慶長度以降から寛文度の造成までの間に堆積した洪水砂層・その下の中世の層。さらにその下の、古墳時代・古代の遺物包含層が、ほぼ対応すると共に、標高もほぼ同じであることがわかる。拝殿南から西南にかけての層序は、ほぼ同様な堆積であると見ることが出来る。

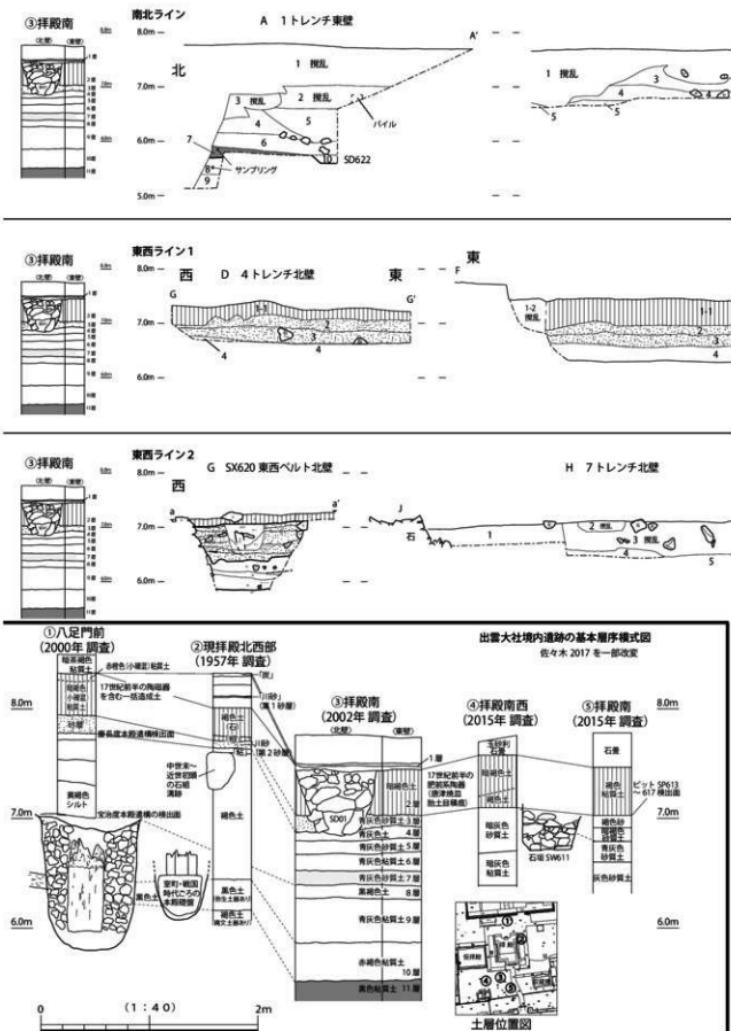
以下、トレンチごとに概要を記す。

1.1 トレンチ(第9図)

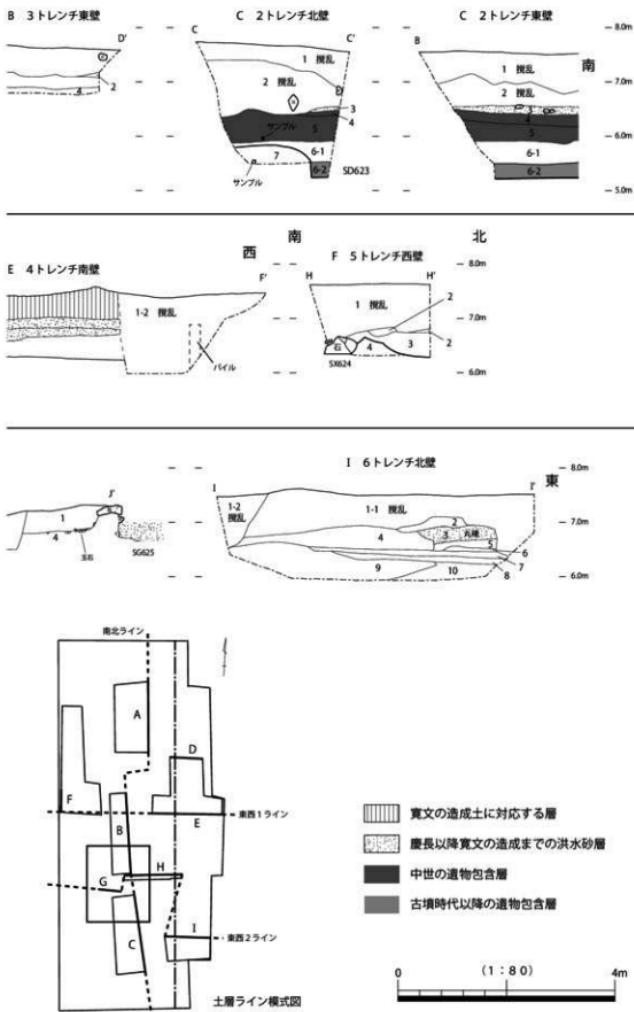
調査区北側に設定した南北トレンチである。トレンチの規模は、南北9.0m、東西4.4m、深さは2.2mである。トレンチ内の北側は、フーチング建設時の掘削により、大きく擾乱を受けている。

遺物包含層は7層である。

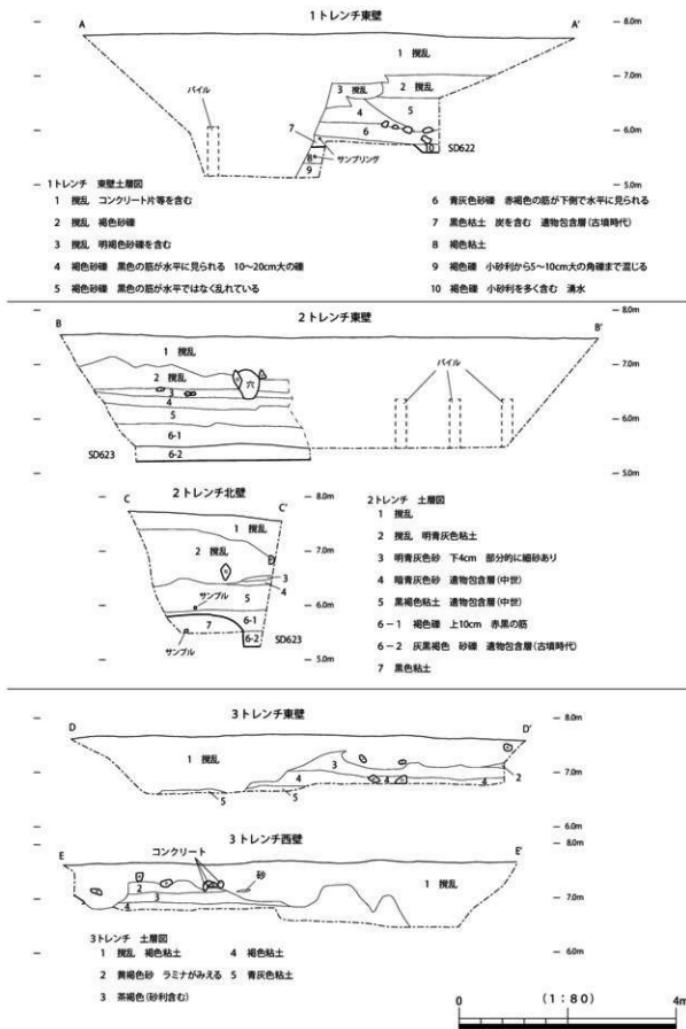
7層は標高5.7~5.9m付近に堆積する。出土遺物(第12図1~5)は、弥生時代から古墳時代にかけての土師器や須恵器が出土した。いずれも小片である。1~3は甕の口縁部。3の口唇部上端は



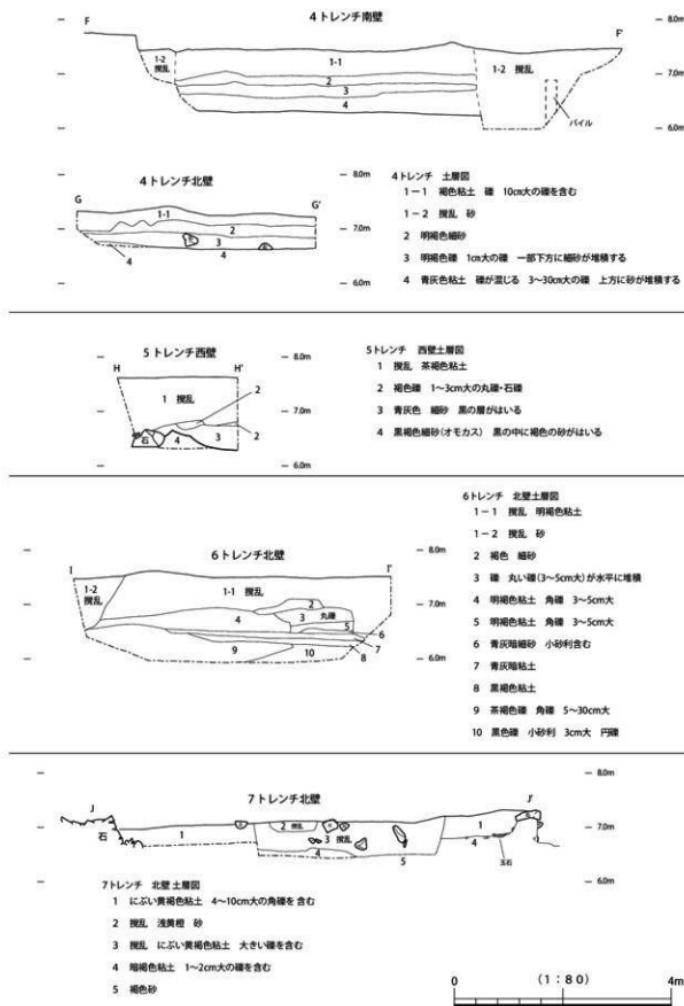
第7図 調査地南北ライン・東西ライン土層図1



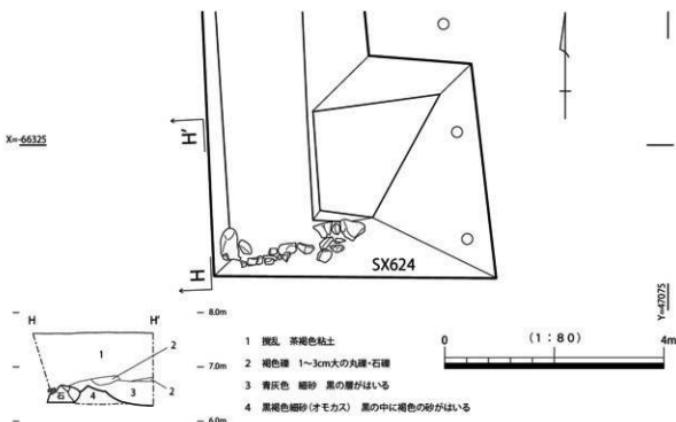
第8図 調査地南北ライン・東西ライン土層図2



第9図 トレンチ土層図1 (1~3トレンチ)



第10図 トレンチ土層図2 (4~7トレンチ)



第11図 SX624 遺構実測図

若干窪む。4は直口壺と思われる口縁部である。内側に指頭圧痕がある。5は鼓形器台の口縁部。いずれも草田5・6期（赤澤1992）。弥生終末から古墳初頭。なお、小片のため図化できなかったが、須恵器の杯蓋も出土している。7層の年代は、古墳時代後期以降である。

遺構は、7層上面から掘り込まれた溝状遺構SD622がある。

東西溝SD622の規模は、長さ2.3m、幅1.3m、深さ0.15mである。遺物は出土していない。確認した範囲が狭いため判断しかねるが、人工の溝ではなく自然流路の可能性も考えられる。湧水する。

2.2 トレンチ（第9図）

調査区南側に設定した南北トレンチである。トレンチの規模は、南北9.9m、東西3.7m、深さは2.1mである。トレンチ内の南側は、フーチング建設時の掘削により、大きく搅乱を受けている。

遺物包含層は、4・5層と遺構の埋土の6-2層である。

4・5層は、中世以降の遺物包含層である。標高5.8～6.5m付近に堆積する。出土遺物は、小片のため図化できなかったが、4層からは、古墳時代の須恵器の甕、古代の土師器の甕と赤色土師器の杯、中世土師器の杯が出土する。5層からは、古代（7～11世紀）の土師器の高杯・甕と赤色土師器の杯、中世の同安窯系青磁碗I-b・大宰府D期（12世紀中頃～後半）などが出土している。

遺構は、7層上面から掘り込まれた溝状遺構SD623がある。

南北溝SD623の規模は、長さ3.2m、幅0.4m、深さ0.6mである。遺物は、溝の埋土下層になる6-2層から出土した。出土遺物（第12図6・7）は、6は土師器の甕の口縁部、7は竈の側壁である。いずれも、古墳時代後期以降である。確認した範囲が狭いため判断しかねるが、人工の溝ではなく自然流路の可能性も考えられる。湧水する。

3. 3 トレンチ（第9図）

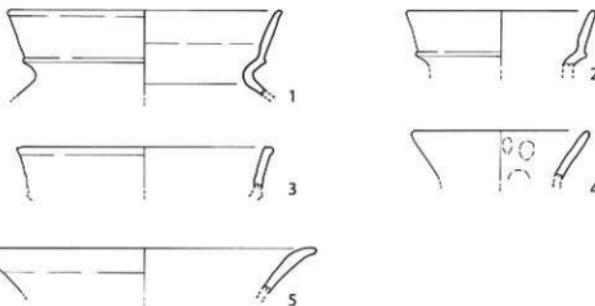
調査区のほぼ中央部に設定したトレンチである。トレンチの規模は、南北 10.4m、東西 2.4m、深さは 1.1m である。トレンチ内の中側は、基礎工事の掘削により、搅乱を受けている。

遺構・遺物ともに確認できなかった。

4. トレンチ（第10図）

東調査区に設定した東西トレンチである。トレンチの規模は、南北 2.3m、東西 9.0m、深さは 1.4m である。トレンチ内の中側は、旧居舍の基礎工事の掘削により、搅乱を受けている。

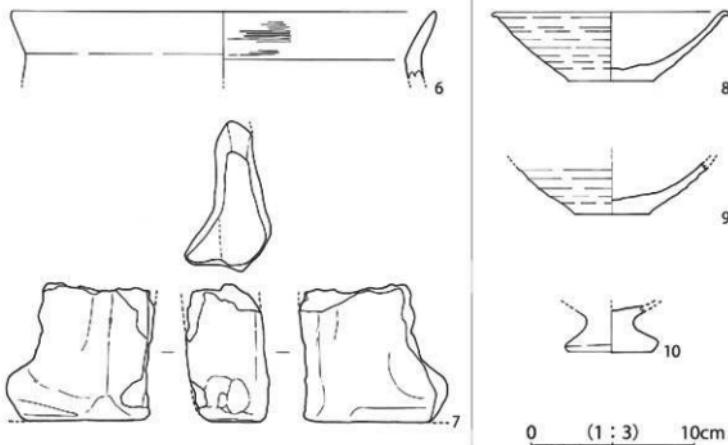
遺構・遺物ともに確認できなかった。



1 トレンチ

2 トレンチ SD623

5 トレンチの東バイル付近



第12図 第1・2・5 トレンチ出土遺物実測図

なお、このトレンチの北側を遺構確認のため北方向に5m拡張したが、遺構の確認は出来なかった。

5. 5 トレンチ（第10・11図）

西側に設定した東西トレンチであるが、層の広がりを確認するため、西側を北に拡張した。トレンチの規模は、東西5.2m、南北13.6mのL字形で、深さは1.4mである。トレンチの東側は、旧庁舎の基礎工事の掘削により、搅乱を受けている。

遺物は出土していない。遺構は4層上面の石列SX624がある。

石列 SX624（第11図）

東西方向の石列である。確認した規模は、東西2.7mである。人頭大の石を1段から3段積み上げる。東側の石は西に、西側の石は東に、南側の石は北に面をそろえているように見えるが、確認した石列が全体の一部のため、石列の機能も含め明確に出来なかった。遺物は出土していない。

なお、4層は、石列SX624から北に向かってなだらかに下がる黒褐色細砂層（オモカス層）である。このような堆積状況は、この場所が川岸付近などで、水の流れが緩やかな場所だったと推定される。

のことから、4層の広がりを確認するため、3.0mの幅で、北に10.0m拡張したところ、拡張した範囲全面に4層が広がっていた。これにより、少なくとも5トレンチ付近は、旧素麿川の中で水がよどむような場所だったと推定する。

また、トレンチ内からは遺物は出土していないが、トレンチ東側でパイルの位置を確認するための掘削時に、中世土師器の壺と柱状高台付壺が出土した。遺物は、標高6.1～6.7mの黒褐色粘土層からの出土で、トレンチ5の3層に該当するが、土質が異なる。のことから、このパイル付近は旧素麿川の川原であった可能性が考えられる。

出土遺物（第12図8～10）は、中世土師器である。

8・9は壺で、体部は内湾しながら立ち上がる。内面の見込みから体部へは、なだらかにつながる。8の口縁端部は外方に屈曲する。鰐淵寺分類（穴道2015）のB類で、12世紀後半から13世紀初め。10は、柱状高台付壺の脚部である。12～13世紀頃であろう。

6. 6 トレンチ（第10図）

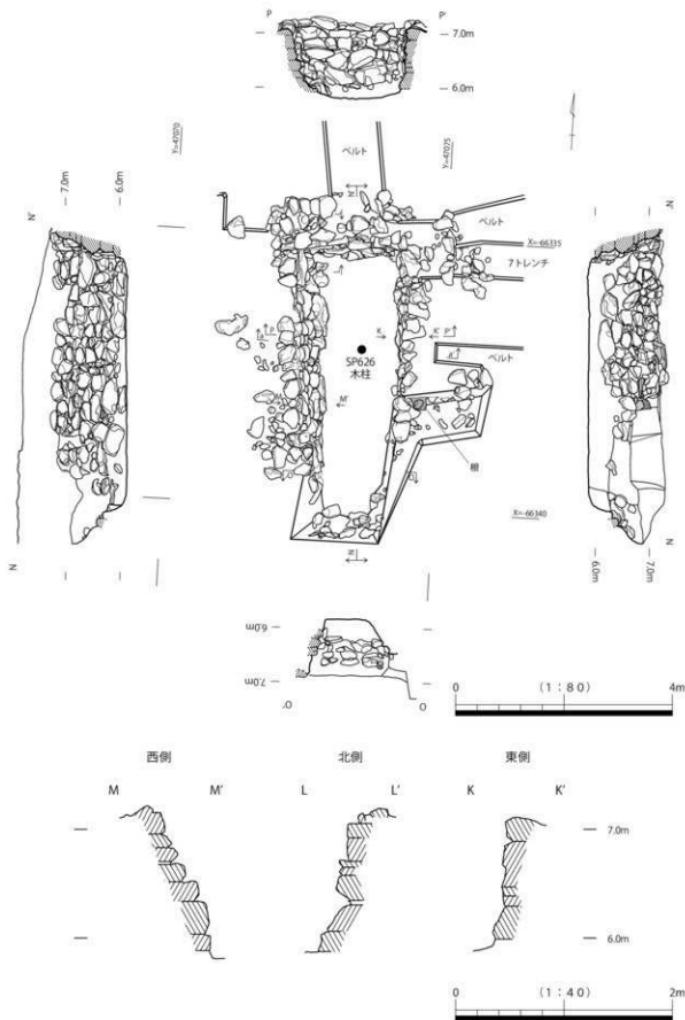
東調査区の南側に設定した東西トレンチである。トレンチの規模は、南北3.2m、東西5.9m、深さは1.7mである。トレンチ内の西側は、旧庁舎の基礎工事の掘削により、搅乱を受けている。

遺物包含層は3層で、玉石の集積層である。標高6.6～6.9m付近に堆積する。

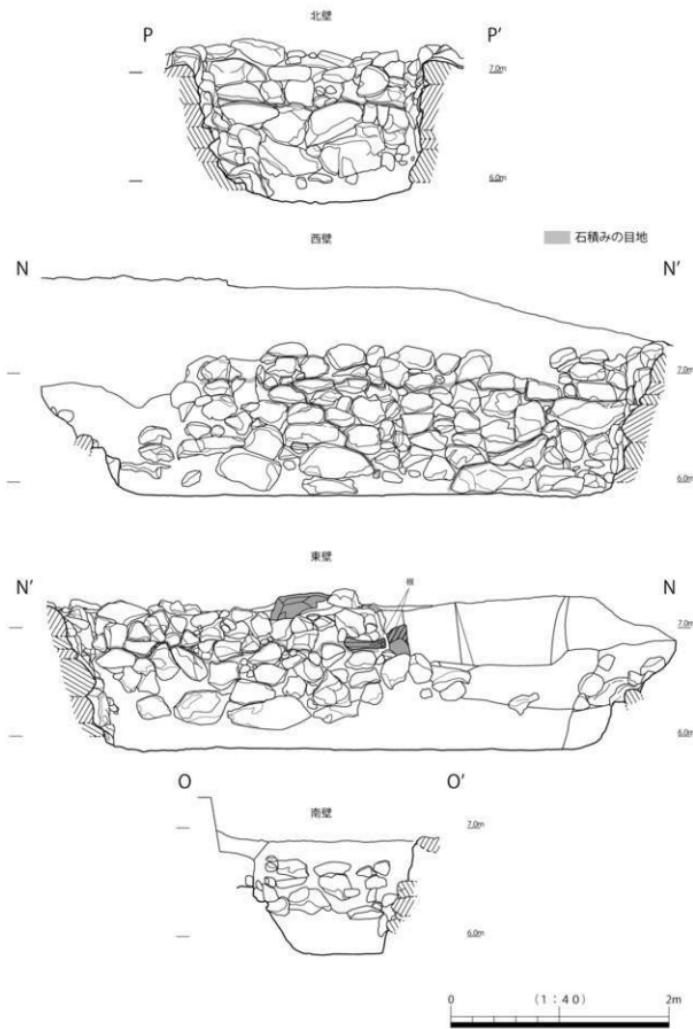
出土遺物は、玉石のみである。この層は、池SG625の南延長上に位置するとともに、池の底の標高とも一致することから、池の底に敷かれた玉石と一連のものであると考える。ただし、礫の堆積層が南壁では確認できることから、池SG625が、このトレンチ内に収まるのか、あるいは、過去の工事等により削平されているのかは判断できなかった。

7. 7 トレンチ（第10図）

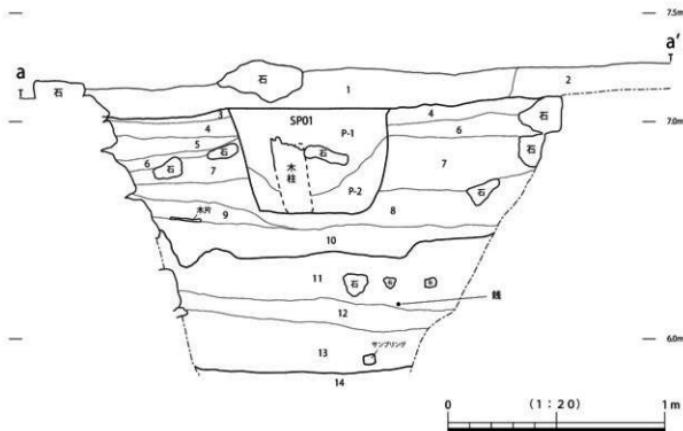
中央調査区と東調査区の間に設定した東西トレンチである。トレンチの規模は、南北0.6m、東西7.5m、深さは0.6mである。トレンチの中央部は、旧庁舎の基礎工事で搅乱を受けている。遺物は出土していない。



第13図 SX620 遺構実測図1



第14図 SX620 造構実測図2



第15図 SX620 遺構東西ベルト土層図

遺構は、トレント西側で SX620 の裏込め石を確認した。東側では、池 SG625 の西側護岸石の裏側から玉石が出土した。

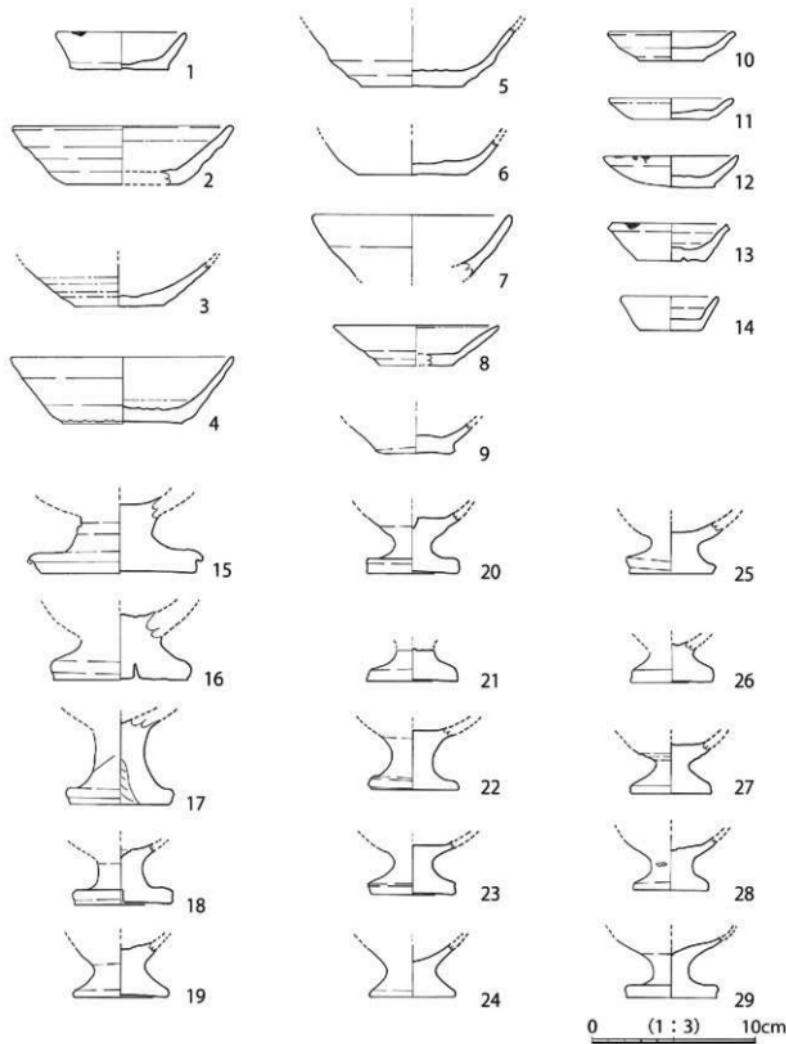
第3節 中央調査区の調査概要

中央調査区は、旧庁舎の1階フロアの南側に該当する場所である。

旧居舎の真下にあたることから、何らかの工事の影響はあると思われていたが概乱土の下には慶長度から寛文度までの間に起きた洪水に伴う黄褐色砂層が堆積し、この層の下から、石組み遺構SX620・石積み遺構SX621・柱穴SP626などが、比較的良好な状態で保存されていることを確認した(第6図)。

1. 石組み造構 SX620 (第 13~15 図)

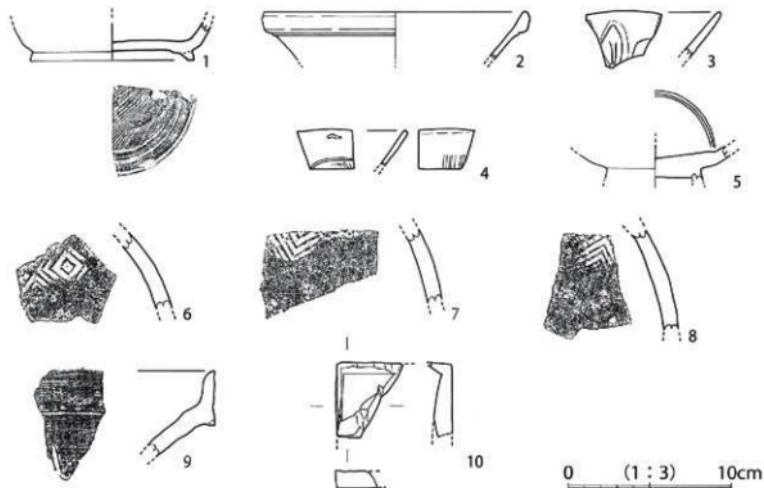
中央調査区の西南部で確認した、南北に細長い長方形の石組み遺構である。規模は、石組み上面の内法で、南北の長さ 5.5m、東西の長さ 1.9m、深さ 1.4m である。壁は四面全て割石を用いて積み上げた。



第16図 SX620出土遺物実測図1（土器1）

げている。底には石は敷かれていがない。南壁と東壁南半分は、石組みの残存状況が悪い。

遺構は、大きく2時期に分けられる。標高6.77m付近で、壁石に横に目地が通ることから、この高さが当初の石組み上面であり、地表面であったと考えられる。その後、改修により、石を約0.54m（標



第17図 SX620出土遺物実測図2（土器2）

高7.31m) 積み増ししたと考えられる（第14図）。

石組みの背面には、北壁で幅0.6m、東壁で幅1.5mの裏込め石を配置するが、この裏込めの高さは、池SG625の西護岸石の標高とほぼ同じであることから、池の築造に併せ実施した、地面の嵩上げ工事に伴うものと推定する。

この他にも改修の痕跡が認められる。

西壁には底面から上面に向かって、V字状に目地が通る場所がある。この目地は、壁の崩壊を補修した名残ではないかと考える。

また、東壁と南壁は、底面から壁石が積まれていない。東壁では底面から0.2m、南壁では0.35m、それぞれ高い位置から積み始められている。さらに、角の組み方も若干の違いが認められる。西北の角は、北壁の石と西壁の石が組み合わされているが、東北の角は、東壁の石が北壁に接するように積み上げられている。

これらのことから、北壁・西壁は、東壁・南壁と同時に造られたものではなく、後の補修をうけた壁と推定する。

遺構内の埋土は、大きく3層に分けられる。（第15図）

1・2層は、寛文度の造成土である。

3～10層までは、慶長度の遷宮以降から寛文度の造成までの洪水砂層である。7層から中世上師器の环（第16図1）が1点出土している。出土遺物の年代は、17世紀中頃以降の年代と考えられる。なお、3・4層上面から、SP626が掘り込まれる。掘方からは柱根以外に遺物が出土していないため、

年代は不明である。

11～13層までは、堆積土であり、遺物包含層である。いずれの層も、松葉・松かさ（松ぼっくり）・枝打ちした小枝などが完全に腐食していない状態で堆積するが、特に11層において著しい。

11層は暗灰色で、松葉等の腐植土である。松かさ（松ぼっくり）などを多量に含む層である。11層の下方で銭貨が出土した。12層は灰色の粘質土で、12層の上面付近から祈禱札が出土した。13層は暗灰色の粘質土で、中世土師器・陶磁器・木製品が出土した。また、11～13層からは、経石が出土した。出土遺物の年代から、16世紀代の堆積土に、12世紀から14世紀代の遺物が含まれていると考えられる。14層上面が底面である。

この石組遺構は、境内の雨水を排水するための溜柵と推定する。

2. SX620 の出土遺物（第16図～24図）

中世土師器・須恵器・陶磁器・硯・木製品・銭貨・経石が出土した。銭貨・経石以外は、いずれも破片である。

（1）中世土師器（第16図1～29）

环・皿・小皿・柱状高台付环が出土した。

1は、7層から出土した皿である。底部付近にナデによる絞り込みが見られ、直線的に立ち上がる。口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として利用されていたと考えられる。鰐淵寺分類H3類で、17世紀中頃以降に相当するとみられる。

2～29は、11～13層から出土した环（2～7）・皿（8・9）・小皿（10～14）・柱状高台付环（15～29）である。

2～7は、环である。2・3は、体部が直線的に立ち上がる。3の内面は、見込みから体部へは、なだらかにつながる。鰐淵寺分類のG1類で、16世紀中頃～後半。4～7は、体部が直線的に立ち上がる。鰐淵寺分類のG2類で、16世紀中頃～後半。

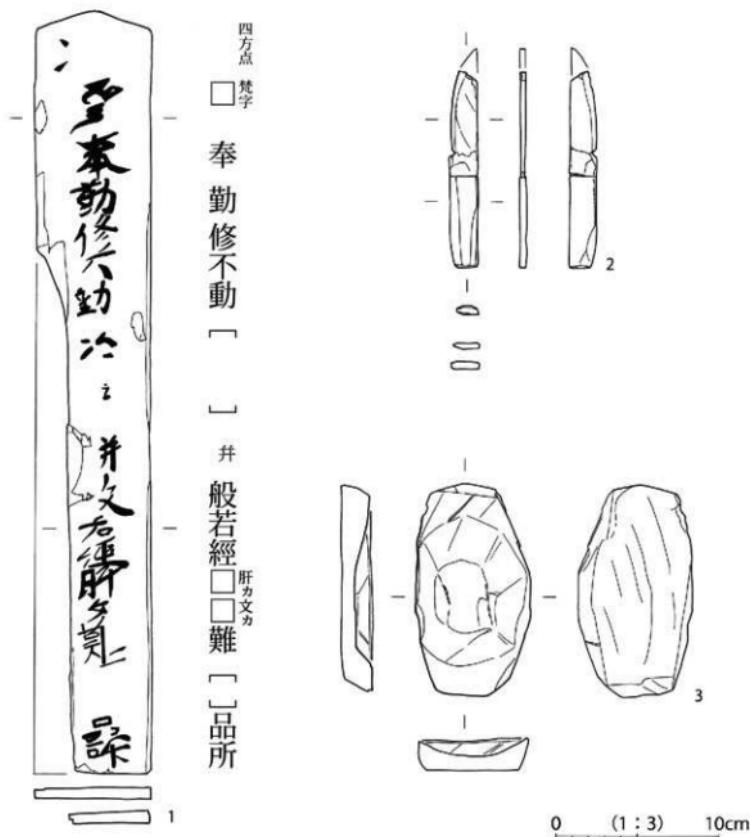
8・9は皿である。8は、体部が直線的に立ち上がる。鰐淵寺分類のC類で、13世紀前半。9は、底部付近にナデによる絞り込みが見られ、直線的に立ち上がる。

10～14は、小皿である。10～12は器高が低く、13・14は器高が高い。13は、口縁端部に面を持つ。12・13は、口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として利用されていたと考えられる。鰐淵寺分類のG・H類で、16世紀後半から17世紀以降に相当するとみられる。

15～29は柱状高台付环である。完形で出土したものは無く、全て脚部分のみである。個体差が著しい。脚の底径は、15が9.6cm、16が8.3cmと大型である。17～29は、6.1～4.45cmであり、ほぼ同一規格である。脚部の長さは、17は長く、19・24・26・27は比較的短い。17の脚部内面には絞り目が認められる。いずれも、12～13世紀頃であろう。

（2）須恵器（第17図1）

1は、高台付の环である。内面の底は硯として使用されていた可能性がある。底部は静止系切である。7世紀末から8世紀初めである。

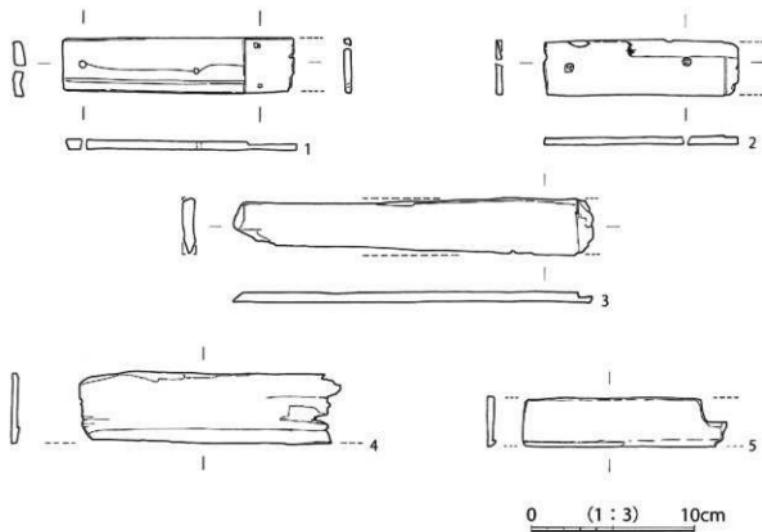


第18図 SX620出土遺物実測図3（木製品1）

(3) 陶磁器（第17図2～9）

白磁・青磁・瓷器系陶器・備前焼が出土した。

2は白磁碗IV類(玉縁口線)である。大宰府C期で、11世紀後半～12世紀前半。3～5は青磁である。3は、龍泉窯系青磁碗I—1類で、外面に花の文様がある。大宰府D期で、12世紀中頃～後半。4は、同安窯系青磁碗で、外面に細かい櫛がき、内面に弧状の沈線が入る。5は、同安窯系青磁碗の底部である。見込みの周辺部に沈線が入る。6～8は、瓷器系陶器の甕である。いずれも安井・中野分類のD類の入子樹文の押印が施される。3片は同一個体の可能性がある。13～14世紀頃と考えられる。9は備前焼の擂鉢である。内面にスリ目が入る。乗岡編年の中世6期である。16世紀初頭～16世紀



第19図 SX620出土遺物実測図4（木製品2）

第3四半期である。

(4) 砧（第17図10）

10は、長方形の赤間硧である。海部から陸部にかけての部分である。15世紀後半～16世紀前半頃。

(5) 木製品（第18～22図）

加工が認められるものを、祈祷札・祭祀具・劍り物・組合せ材・用途不明品に分類した。なお、図示できなかったが、漆碗の極小片も出土している。

祈祷札（第18図1）

長さ46.4cm、幅7.1cm、厚さ0.55～0.75cmの杉板である。頭頂部を山形に加工する。釘穴は無い。左側が大きく削られているが、廃棄時のものと思われる。表面には墨書き文字が見られるが、裏面には見られない。

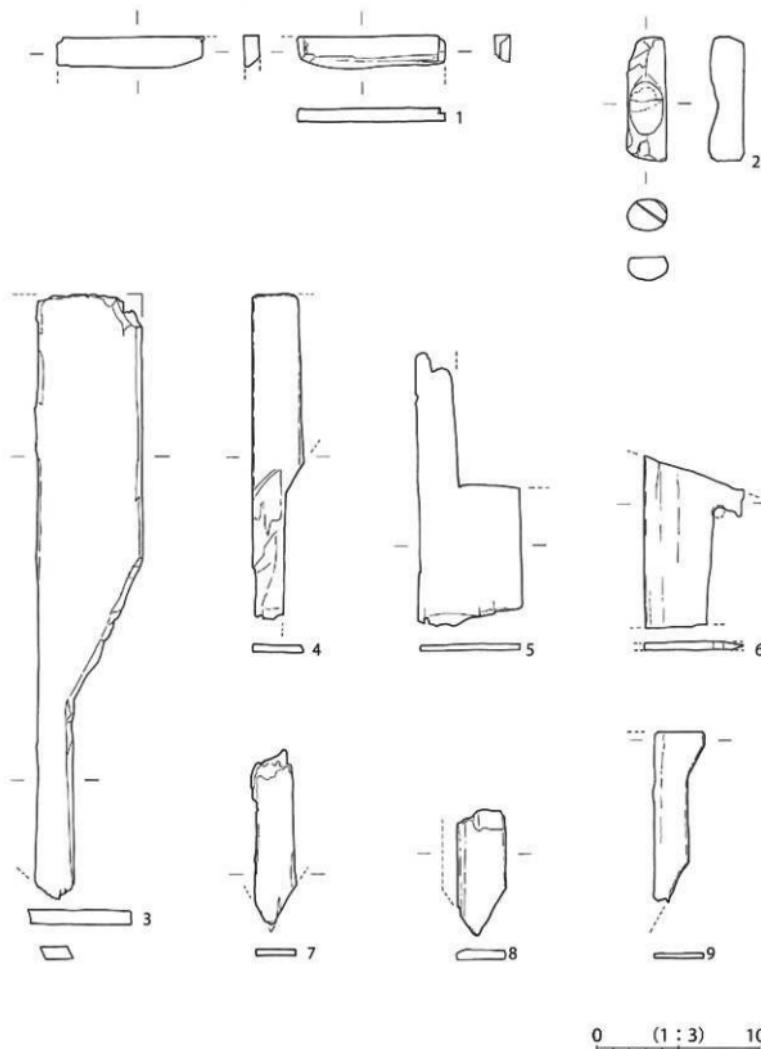
文字は、「[四方点] □奉勤修不動 [] ■般若經□□難 [] 品所」と判読した。

祭祀具（第18図2）

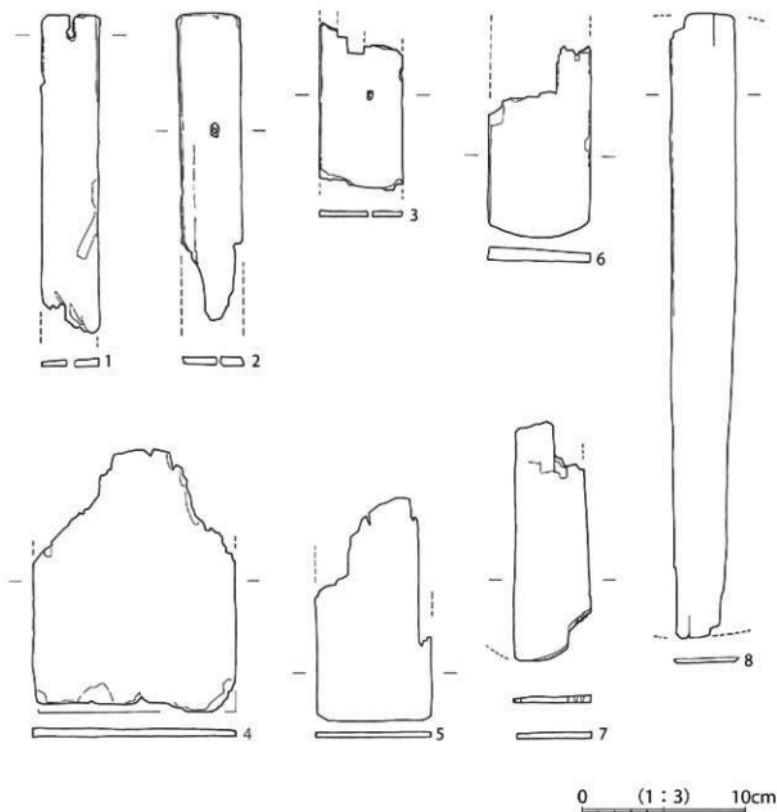
刀子状木製品。長さ11.9cm、幅1.7cm、厚さ0.25～0.45cmである。切っ先は欠損する。柄と刃部を丁寧に作り出し、刃部には刃も表現する。精巧な作りである。

劍り物（第18図3）

皿状の劍り物。長さ13.0cm、幅7.0cm、厚さ0.8～1.9cmの不整形な梢円形である。中央を1.0cm窪ませる。全体に火を受けている。



第20図 SX620出土遺物実測図5（木製品3）



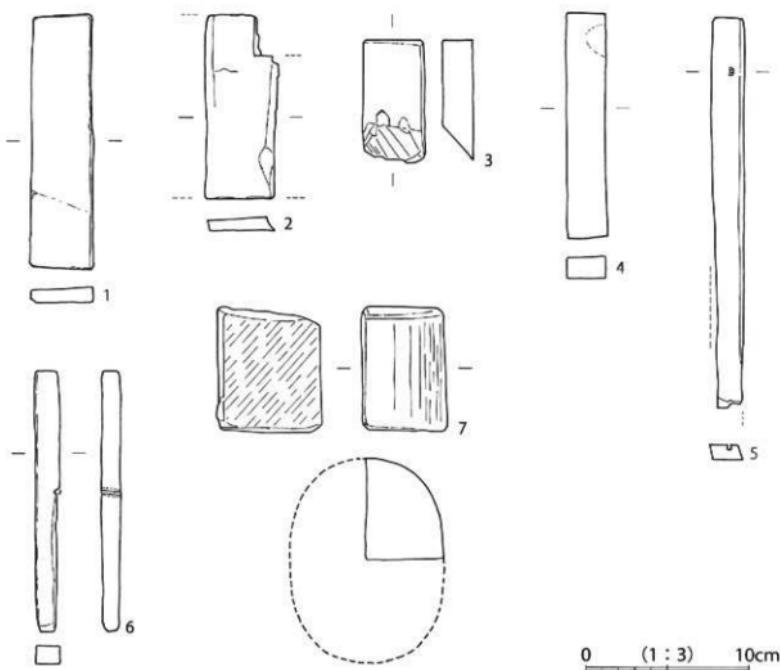
第21図 SX620出土遺物実測図6（木製品4）

組合せ材（第19図1～5）

板状の組合せ材である。長さ12.0～22.2cm、幅3.0～4.4cm、厚さ0.25～0.7cmである。1～3は、相欠き状に一段削られた重ね合わせ部分が残る。1・2は、穴が見られる。1は横方向に溝を設け、4・5は横方向に段を設けるが、これらは底板などの受け部と推定する。

用途不明材（第20図1～9）

1は、長さ8.9cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmである。柄状の突起が細工されており、各面も丁寧に加工され、きれいに仕上げられていることから、調度品の組合せ材と推定する。2は、長さ7.6cm、幅2.4cm、厚さ1.9cmである。中央が2方向から切り取られている。3～9は、いずれも板状のものである。3・4は、片側を斜めに切り落とす。5は四角く、6は斜めに切り落とす。また、6は穴が開いていた可



第22図 SX620出土遺物実測図7（木製品5）

能性がある。7～9は、先端を尖らす。また、9は先端以外の場所も斜めに加工する。

用途不明材（第21図1～7）

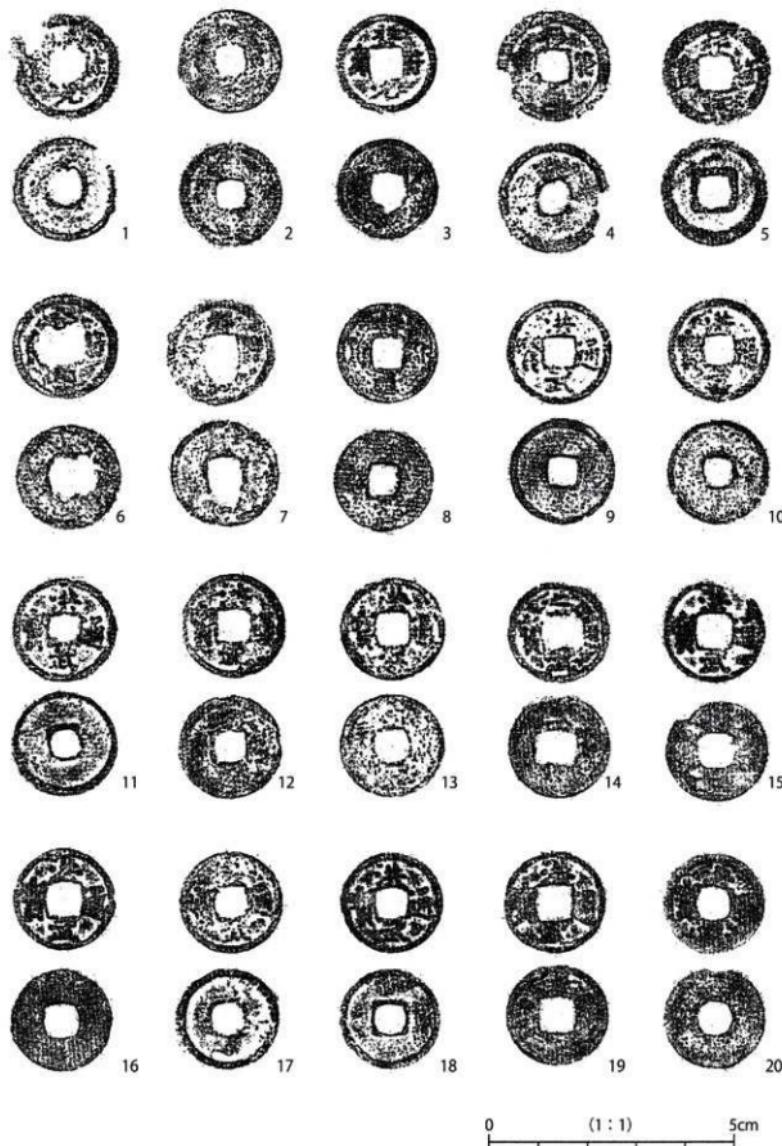
1～8は、いずれも厚さ0.2～0.8cmの薄板である。1～3は、穴が開く。1は、丸い穴が端にあり、そこから破損していることから、木札のような物が考えられる。4・5は、幅の広い薄板である。6～8は、端が弧を描く。6は、0.6～0.8cmと厚みがある。7は、斜めに切り落とした部分がある。8は、両端が弧を描くことから、曲物の底板とも考えられる。

用途不明材（第22図1～7）

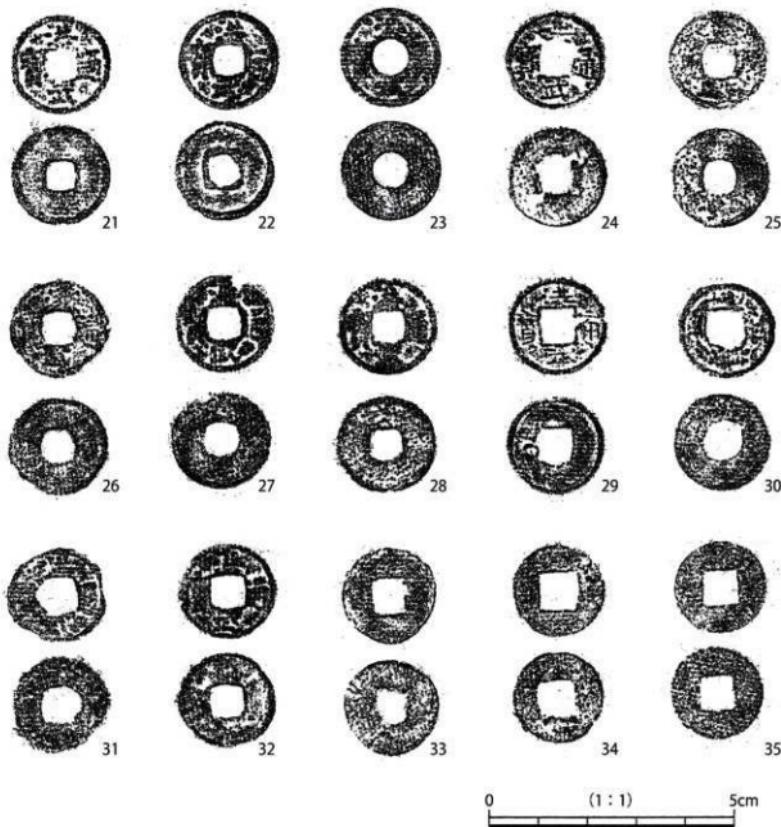
1～6は、いずれも厚さ0.7～1.9cmの厚板である。3は表面を丁寧に加工しており、斜めの切断面には加工痕が明瞭に残る。5は、小さな窪みがある。6は、穴の場所で破損したものようである。7は、切断面にのこぎり引きの痕跡が良く残る。廃材であろう。

（6）銭貨（第23・24図 1～35）

35枚出土した。数枚ずつが融着した状態だったことから、元は紐などを通して束にした緞錢の状態だったと思われる。孔に通した紐などは残存していなかった。銭種は、祥符元宝（北宋・初鑄年1009年）



第23図 SX620出土遺物拓影図1 (錢貨1)

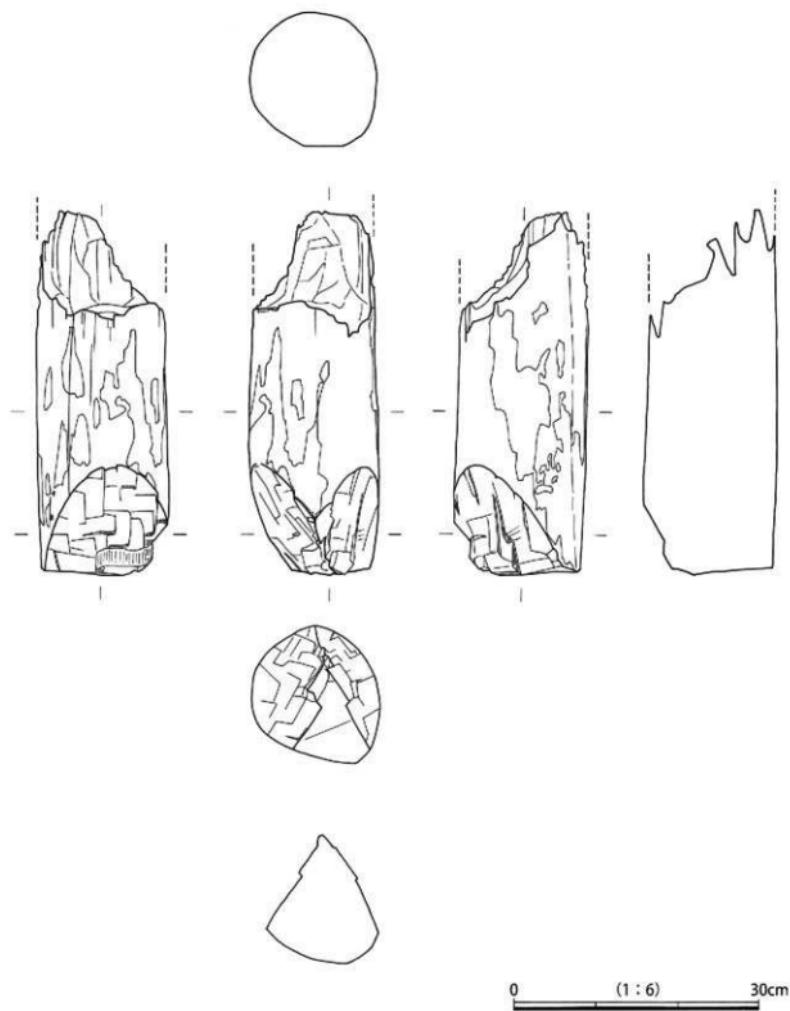


第24図 SX620出土遺物拓影図2（銭貨2）

3枚。祥符通宝(北宋・初鑄年1009年)5枚。洪武通宝(明・初鑄年1368年)が24枚。無文3枚である。いずれも、銭名が不鮮明で、銭径が小さく、厚さも薄く、重量が軽いことなどから模鋳銭と判断した。国内での模鋳銭の流通は、一般的に14世紀後半から16世紀頃であることから、この銭貨もその頃と考えられる。

(7) 経石

丸い扁平な石が約130個出土した。このうち、85個に墨書が認められ、そのうち57個について文字が判読できた。墨書率は65%である。墨書率が高いことから、元々は全ての石に墨書されていたと考えられ、一字一石経と推定する。また、文字の書体の違いから、多数の人の手によるものと判断できる。墨書文字は、いずれも漢字と判断した。



第25図 SP626出土遺物実測図1(木柱)

片面のみに墨書きがあるものは、以下のとおりである。

数 字 「一」「五」「十」「百」は自「億」

経 文 「婆」「上」は辻」「開」「無」「力」「菩」「不」「却」「經」「亡」は也」「處」「写」カ」「奉」カ」「恒」

「入」「生」「去」「是」「如」「偈」「義」「上」「利」「外」カ」「施」「可」「中」「佛」

自 然 「木」「水」は求」「風」

その他 「車」カ」「特」カ」「誂」「雖」「廣」「太」カ」「富」「譬」「訖」「何」「欠」「等」「分」「復」「堵」

「宋」カ」「鼓」「就」「於」「丈」

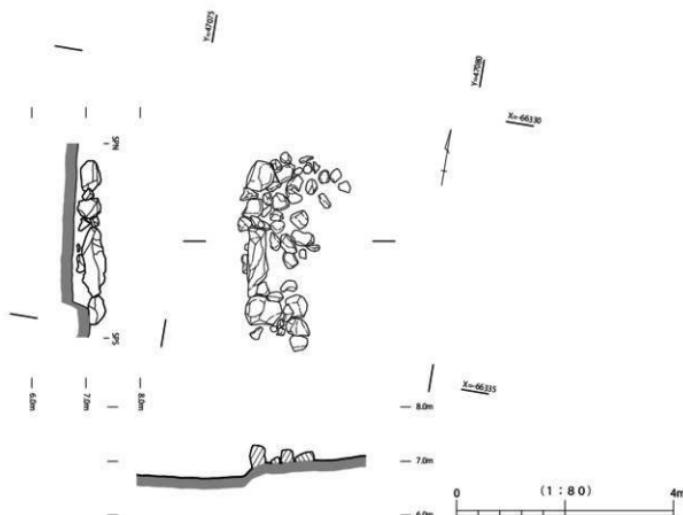
両面に墨書きがあるものは、次のとおりである。「諸」の裏面に「諸」カ」

3. 柱穴 SP01 (第 13 ~ 15 図)

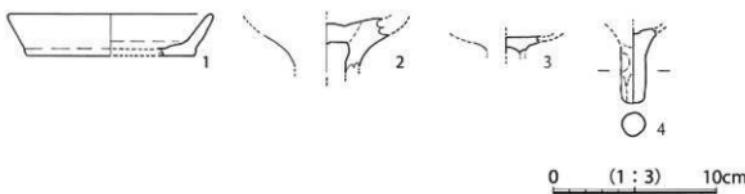
中央調査区の西南側。石組み遺構 SX620 のほぼ中央の位置で確認した。柱穴は、SX620 の 3・4 層上面から掘り込まれている。

柱穴の掘方は、SX620 の土層観察用の東西ベルトで確認したのみのため、平面形の形状は不明である。規模は、東西の長さ 0.68m、深さ 0.4m で、ほぼ垂直に掘り込む。掘方には松の木柱が残存していたが、他には出土遺物は確認できなかったため、年代は不明である。

柱穴の続きを確認するため、周辺を精査したが、他には見つからなかった。もともと 1 穴なのか、あるいは、複数あったものなのか、さらには、どの方向に続くのかなどは、不明である。



第 26 図 SX621 遺構実測図



第27図 中央調査区遺構外出土遺物実測図

このような状態のため、本来の機能は不明であるが、現在の境内の西南端に位置することから、境内と境外を区画する垣や柵とも考えられる。

4. 柱穴SP01の出土遺物（第25図）

（1）木柱（第25図）

長さ44.5cm、直径16.3cmの樹皮付きの松材である。本来の長さは不明である。上端は平らに切断されている。先端を2方向から加工するが、杭のように尖らせずに平らに切断する。

5. 石積み遺構SX621（第26図）

中央調査区の東北側で確認した遺構である。西に面を向けた南北の長さ3.0m、高さ0.4mの石列である。石は1段のみ確認した。背面の東側に裏込め石と思われる石を配置する。確認できた幅は東西2.0mである。遺物は出土していない。本来の機能は、建物の基壇や石垣などが考えられるが、明らかに出来なかった。

6. 遺構外の出土遺物（第27図）

いずれも破片である。1は、中世土師器の壊である。底部付近にナデによる絞り込みが見られ、直線的に立ち上がる。鰐淵寺分類のH3類で、17世紀中頃以降。2・3は、土師器の高壊である。摩滅が著しい。古墳時代以降であろう。4は、製塩土器の脚である。古代以降であろう。

第4節 東調査区の調査概要

東調査区は、新庁舎によって、新たに掘削される範囲であることから、当初から全面調査の対象としていた。しかし、北側は仮拌殿の建設工事により、また、南側は地下埋設物などが縦横に付設されている可能性があったことから、遺構の残存状況は悪いと考えられた。ところが、中央部分で、慶長度から寛文度までの間に起きた洪水に伴う黄褐色砂層が堆積し、この層が、池SG625を覆うことで、遺構が比較的良好な状態で保存されていることを確認した（第6図）。

また、この調査区の東側（東調査区東）では、矢板打設前の事前掘削時に、地表面直下で延享度の庁舎に伴う石組水路SD609を確認した（第6図）。

1. 石組水路SD609（延享度の庁舎の西面雨落ち溝）（第28図）

東調査区の中央東側で、南北方向の石組水路を確認した。

遺構の深さは、南側では地表面直下であったが、北側では地表面下0.46mの深さであった。

石組水路の規模は、長さ10m、内幅0.4m、深さ0.18m。割石組みで底石は認められない。水路底には、

モルタルが貼られた部分もあり、後世の改変が認められた。遺物は、出土していない。

この石組水路は、延享度の庁舎を構成する水路である。延享度の庁舎は、礎石建物跡 SB601（礎石の根石 SX602～608）・雨落ち溝（石組水路 SD609）・石組水路 SD610（SD609 の排水用水路）からなる建物であるが、今回の石組水路は、雨落ち溝（石組水路 SD609）に該当するものである。

従来の調査では、西面の雨落ち溝については、西南角から北に3mまでが確認されていたが、今回の調査により、さらに北側に10m続くことが明らかとなった。

2. 池 SG625（第29・30図）

東調査区の中央で、東西方向の石列（北側護岸石）と南北方向の石列（西側護岸石）を確認した。

2つの石列が直角に接するとともに、石列に囲まれた東南側で玉石が一面に出土したことから、方形の池と判断した。池の大半は調査地区外に広がるため、規模等の詳細は不明である。

（1）池の北側護岸

東西方向の石列が、池の北岸の護岸石である。

確認した護岸の規模は、東西4.5m、高さ0.72mである。池側となる南側は州浜となるが、反対の北側の面は石列が露出した状態である。護岸石は、割石を用いており、北向きに面をそろえ、垂直に2段ないし3段に積む。東側の石は比較的大ぶりだが、西側は小ぶりな石を用いている。石組みの一部に、下段の石と石の間の谷間に上段の石を落し込む（谷積み・落し積み）技法が見られる。

一方、反対の池の内側となる南側は州浜である。

州浜は、南に向かってなだらかに下り、池底につながる。州浜にも池底にも玉石が一面に敷き詰められている。なお、この玉石の一部に墨書きが認められることから経石も含まれる。

（2）池の西側護岸

南北方向の石列が、西岸の護岸石である。

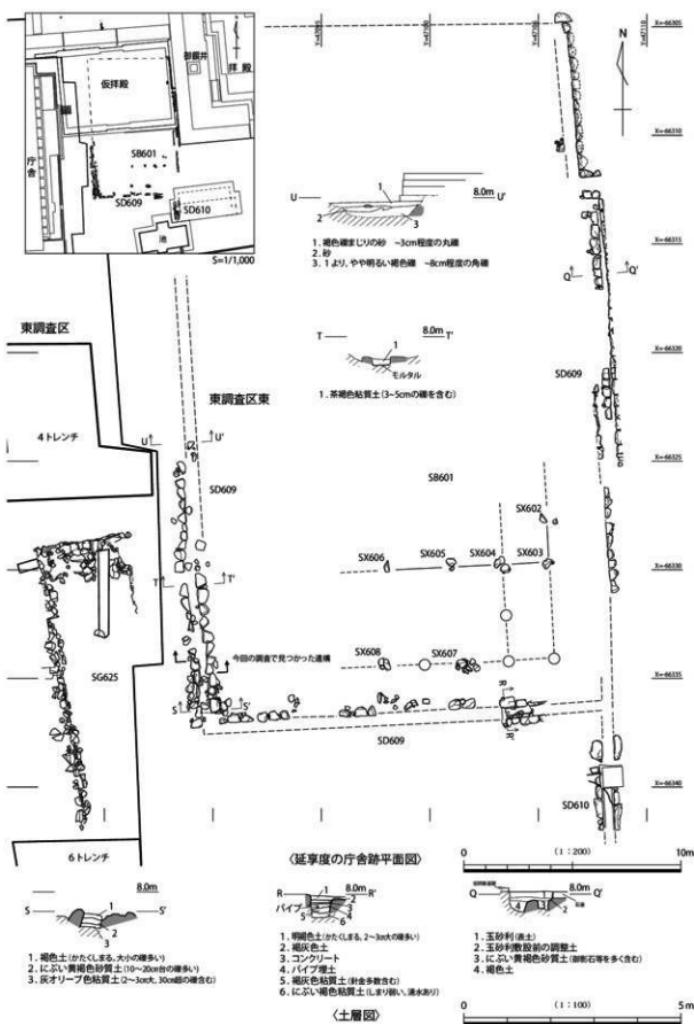
確認した護岸の規模は、南北13.2m、高さ0.7mである。護岸石は、自然石を用いており、東向きに面をそろえ、垂直に2段ないし3段に積む。全体に小ぶりな石を用いる。石組みは、比較的難な積み方である。

なお、西側の護岸南端については、護岸石が撤去されているため不明であるが、池の南側の6トレンチの北壁に、玉石が水平に堆積した層（3層）が認められ、この層の下部の標高が池底の玉石の標高とほぼ一致する。

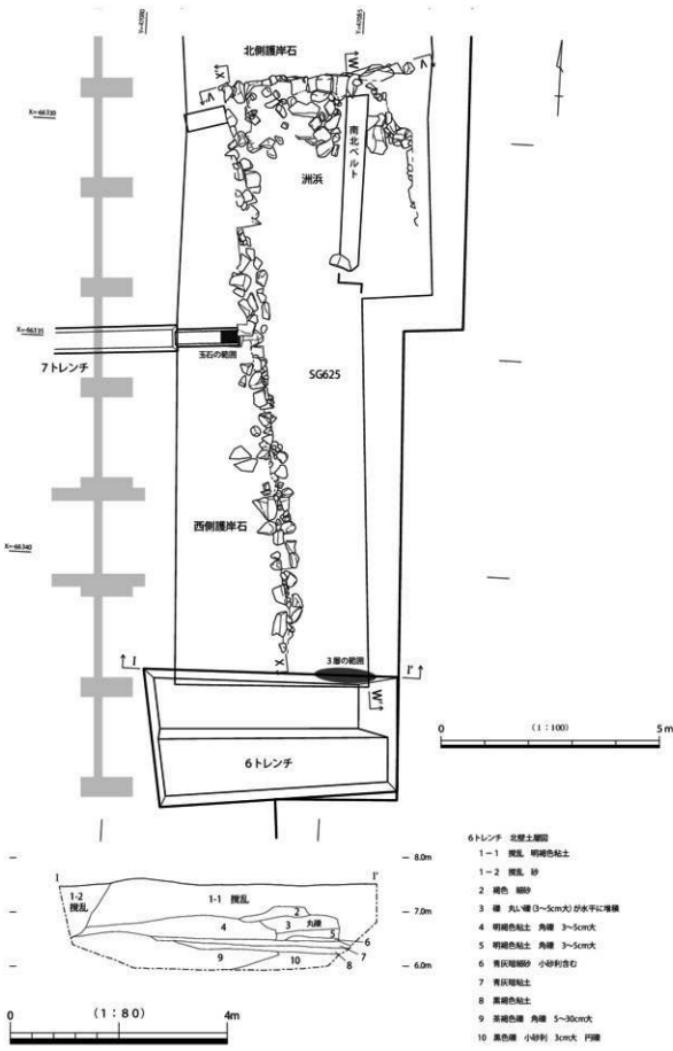
また、西側護岸石を南に延長すると、3層の玉石の場所は、護岸石より東側となり、池の内側に位置することとなる。このことから、この玉石は、元々は池底に敷かれた玉石と考えることができ、池は6トレンチ内まで広がっており、護岸石の南北の長さは少なくとも14m以上だったと推定できる。

（3）池の埋土

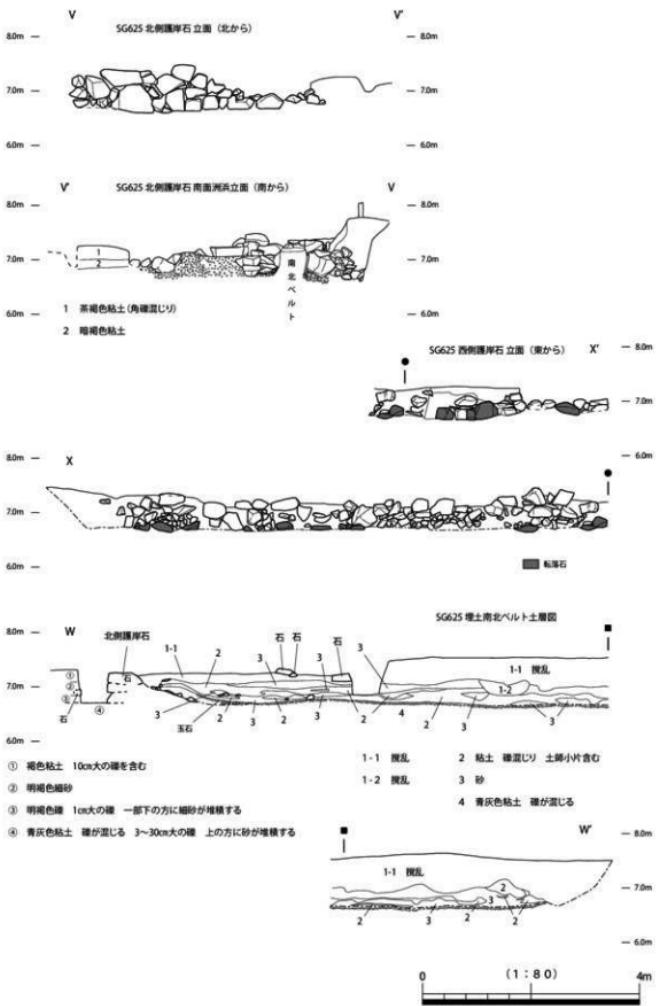
池の埋土は、洪水に由来すると思われる砂と粘質土の互層である。互層中からは、中世土師器、陶磁器などの小片が出土した。いずれも、洪水による流入品と考える。出土遺物の年代は、12世紀から16世紀代頃の年代が考えられる。また、大小の石材が多数出土した。これらは、池に伴う石材のみとは考えられず、周辺の施設に用いられていた石材も含まれている可能性が考えられる。



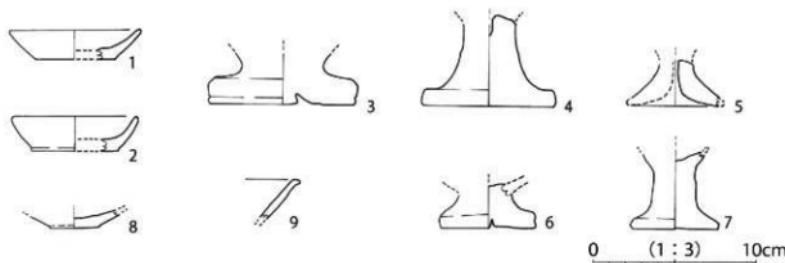
第28図 SD609 遺構実測図



第29図 SG625 造構実測図 1



第30図 SG625遺構実測図2・埋土南北ベルト土層図



第31図 SG625出土遺物実測図

3. 池SG01の出土遺物（第31図1～9）

中世土師器・陶磁器・経石が出土した。経石以外は、いずれも破片である。

(1) 中世土師器（第31図1～7）

小皿・柱状高台付壺が出土した。

1・2は小皿である。1は、体部が直線的に立ち上げる。鰐淵寺分類のC類で、13世紀後半。2は、体部が内湾して立ち上がる。鰐淵寺分類のE類で、13～14世紀。

3～7は、柱状高台付壺である。完形で出土したものは無く、全て脚部分のみである。個体差が著しい。脚の底径は、3が8.8cm、4が8.0cmと大型である。5～7は、5.1～5.75cmであり、ほぼ同一規格である。脚部の長さは、4・7は長く、3・6は比較的短い。5の脚部内面は穴が通る。いずれも、12～13世紀頃であろう。

(2) 陶磁器（第31図8・9）

白磁が出土した。

8は白磁皿IV類で、底部である。大宰府C期で、11世紀後半～12世紀前半。9は白磁碗V—4類で、口折口縁である。大宰府D期で、12世紀中頃～後半。

(3) 経石

丸い扁平な石が約3830個出土した。このうち、206個に墨書きが認められ、そのうち58個について文字が判読できた。墨書き率は5%である。これらは、一字一石経と推定する。また、文字の書体の違いから、多数の人の手によるものと判断できる。墨書き文字は、いずれも漢字と判断した。

片面のみに墨書きがあるものは、以下のとおりである。

数字 「一」「一」「三」「六」「九カ」「十」「億」

経文 「經」「經」「亡^{まは}七」「行」「薩」「須」「今カ」「衆カ」「金カ」「香」「亡カ」「小カ」「佛」

「面」「來」「本」「在」「羅」「心」「心」「以」「人^{まは}丁」「外」「勒」「諸」「内カ」「文」

「大」「手^{まは}乎」「生^{まは}朱^{まは}立」「是」「為カ」「人」「人」

自然 「月」「天」

その他 「應カ」「紛」「近」「形」「畢」「證」「転」「覺」「乃」「薄カ」「近」「往」「傍カ」「扮カ」「奥カ」

【参考文献】

土器

赤澤秀則 1992 「IV小結」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』5 南講武草田遺跡 烏根県鹿島町教育委員会

中世土師器（鰐淵寺編年）

穴道年弘 2015 「第7章総括 第3節鰐淵寺の陶磁器・土師器」「出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書」(出雲市文化財報告 28) 出雲市教育委員会

貿易陶磁器（大宰府編年）

山本信夫 1995 「Ⅲ土器・陶磁器 11 貿易陶磁器 [2] 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

横田賢二郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館普及会

備前焼（乘岡編年）

乗岡実 2008 「備前焼の編年について」『第7回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』山陰中世土器検討会

壺器系陶器（安井・中野分類）

安井俊則・中野晴久 2012 「第4章特論 第1節 2 常滑焼の押印・刻文」「愛知県史」別編窯業 3（中世・近世常滑系）愛知県

硯

原田倫子 2005 「中国地方における中世遺跡出土の硯」「古文化談叢」第53集九州古文化研究会

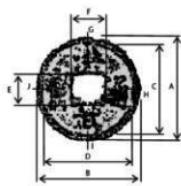
第2表 出土遺物観察表1（土器・土製品・石製品）

第3表 出土遺物観察表2（木製品）

| 標示番号 | 種類 | 形態 | 長さ | 幅 | 厚さ | 木造り | 編織 | 備考 |
|------|-------|----------|------|-------|-----------|------|----|------------------------------|
| 18.1 | 舟荷札 | | 46.4 | 7.1 | 0.5~0.75 | 板目取り | 糸 | |
| 18.2 | 塑像 | 刀子状 | 11.9 | 1.7 | 0.25~0.45 | 板目取り | | |
| 18.3 | 鉢付物 | 縦状 | 13.0 | 7.0 | 0.8~1.9 | 板目取り | | 全体に火炎うけ器 |
| 19.1 | 組合せ材 | 曲物・折曲の一端 | 3.4 | 14.2 | 0.3~0.6 | 板目取り | | 圓丸方形容の孔 |
| 19.2 | 組合せ材 | 曲物・折曲の一端 | 3.3 | 12.0 | 0.4~0.5 | 板目取り | | 圓丸方形容の孔 |
| 19.3 | 組合せ材 | 曲物・折曲の一端 | 3.5 | 22.2 | 0.7 | 板目取り | | |
| 19.4 | 組合せ材 | 曲物・折曲の一端 | 4.4 | 16.2 | 0.25~0.45 | 板目取り | | |
| 19.5 | 組合せ材 | 曲物・折曲の一端 | 3.0 | 12.6 | 0.3~0.5 | 板目取り | | |
| 20.1 | 用途不明材 | 棒 | 1.9 | 8.0 | 0.8 | 板目取り | | |
| 20.2 | 用途不明材 | 縦状 | 7.6 | 2.4 | 1.9 | 心材 | | |
| 20.3 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 37.3 | 6.4 | 0.7~0.9 | 板目取り | | |
| 20.4 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 20.0 | 3.1 | 0.4~0.55 | 板目取り | | |
| 20.5 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 16.9 | 6.4 | 0.35 | 板目取り | | |
| 20.6 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 10.6 | 6.0 | 0.4~0.5 | 板目取り | | 直径約8mmの孔 |
| 20.7 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 10.7 | 2.7 | 0.35~0.5 | 板目取り | | |
| 20.8 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 7.7 | 2.9 | 0.55~0.65 | 板目取り | | 加工痕が少しある |
| 20.9 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 3.0 | 10.5 | 0.25~0.3 | 板目取り | | |
| 21.1 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 19.8 | 3.4 | 0.3~0.55 | 板目取り | | 圓丸方形容の孔 |
| 21.2 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 4.0 | 19.0 | 0.4~0.55 | 板目取り | | 半整な圓丸方形容の孔 |
| 21.3 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 10.3 | 5.3 | 0.3~0.4 | 板目取り | | 圓丸方形容の孔、縦0.3cm 縦0.2cm |
| 21.4 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 16.2 | 12.55 | 0.3~0.55 | 板目取り | | 削痕に加工痕残る |
| 21.5 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 13.8 | 7.2 | 0.25~0.3 | 板目取り | | |
| 21.6 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 11.7 | 6.3 | 0.6~0.8 | 板目取り | | |
| 21.7 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 14.8 | 4.8 | 0.3~0.4 | 板目取り | | |
| 21.8 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 38.5 | 4.0 | 0.2~0.25 | 板目取り | | |
| 22.1 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 15.8 | 3.9 | 0.8~0.95 | 板目取り | | |
| 22.2 | 用途不明材 | 板状（薄い） | 11.3 | 4.5 | 0.7~0.85 | 板目取り | | |
| 22.3 | 用途不明材 | | 7.6 | 3.9 | 1.9 | 板目取り | | カットあり |
| 22.4 | 用途不明材 | | 13.9 | 2.45 | 1.3~1.35 | 板目取り | | |
| 22.5 | 用途不明材 | | 24.2 | 2.0 | 0.9~1.0 | 板目取り | | 縦に割れている 元は棒状？ 圓丸方形容の孔、途中で止まる |
| 22.6 | 用途不明材 | | 16.0 | 1.5 | 1.1~1.2 | 板目取り | | 縦に割れている 元は棒状？ 四角い孔、斜めか？ |
| 22.7 | 用途不明材 | 板状（1／4） | 7.8 | 4.8 | 6.3 | 心材 | | 復元 直径12.6cm 厚径9.6cm |
| 25.1 | 木材 | | 44.5 | 16.3 | — | 心材 | 壳 | |

第4表 出土遺物観察表3（錢貨）

| 緑番号 | 銘種 | 外径 | | 内径 | | 孔径 | | 孔の形 | 厚み | | | | 重量 g |
|-----|---------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-----|------|------|------|------|------|
| | | A | B | C | D | E | F | | G | H | I | J | |
| 23 | 1 銀円 | 21.36 | 21.21 | 18.00 | 17.91 | 7.62 | 7.40 | 圓丸 | 0.52 | 0.65 | 0.69 | 0.63 | 1.66 |
| | 2 銀円 | 21.03 | 20.89 | 17.76 | 17.72 | 6.69 | 6.16 | 圓丸 | 0.62 | 0.45 | 0.38 | 0.54 | 2.06 |
| 3 | 銀円 | 20.37 | 20.65 | 16.84 | 17.03 | 7.07 | 7.22 | 四角 | 0.52 | 0.49 | 0.56 | 0.57 | 1.78 |
| 4 | 銀円 | 22.83 | 23.00 | 18.14 | 18.45 | 6.63 | 6.84 | 圓丸 | 0.58 | 0.58 | 0.64 | 0.62 | 2.10 |
| 5 | 銀円 | 21.94 | 22.15 | 17.38 | 16.78 | 6.93 | 6.98 | 圓丸 | 0.91 | 0.82 | 0.87 | 0.85 | 2.01 |
| 6 | 銀円 | 21.53 | 21.28 | 18.06 | 19.41 | 10.44 | 7.15 | 不整形 | 0.47 | 0.43 | 0.45 | 0.63 | 1.43 |
| 7 | 銀円 | 21.49 | 21.92 | 18.78 | 18.77 | 10.52 | 7.55 | 四内 | 0.58 | 0.42 | 0.45 | 0.50 | 1.58 |
| 8 | 銀円 | 20.40 | 20.44 | 17.99 | 17.46 | 6.58 | 6.50 | 四内 | 0.20 | 0.34 | 0.35 | 0.39 | 1.69 |
| 9 | 洪武通宝 | 21.22 | 21.21 | 18.59 | 18.13 | 6.11 | 6.32 | 四角 | 0.64 | 0.64 | 0.69 | 0.62 | 1.98 |
| 10 | 洪武通宝 | 21.11 | 20.90 | 18.31 | 17.96 | 6.68 | 6.05 | 四内 | 0.52 | 0.63 | 0.72 | 0.59 | 1.94 |
| 11 | 洪武通宝 | 20.96 | 21.07 | 18.44 | 17.69 | 6.04 | 6.01 | 圓丸 | 0.61 | 0.65 | 0.64 | 0.64 | 2.01 |
| 12 | 洪武通宝 | 20.96 | 20.76 | 18.13 | 18.02 | 6.67 | 6.64 | 四内 | 0.68 | 0.52 | 0.44 | 0.64 | 2.23 |
| 13 | 洪武通宝 | 20.95 | 21.15 | 18.79 | 18.60 | 7.16 | 6.82 | 四内 | 0.79 | 0.80 | 0.60 | 0.71 | 2.14 |
| 14 | 洪武通宝 | 20.83 | 20.48 | 18.03 | 18.13 | 6.58 | 8.33 | 不整形 | 0.20 | 0.36 | 0.37 | 0.36 | 0.97 |
| 15 | 洪武通宝 | 20.57 | 20.36 | 18.86 | 18.57 | 7.19 | 7.83 | 圓丸 | 0.34 | 0.28 | 0.37 | 0.34 | 1.10 |
| 16 | 洪武通宝 | 20.56 | 20.65 | 18.57 | 18.44 | 7.48 | 7.72 | 四内 | 0.23 | 0.35 | 0.30 | 0.20 | 1.29 |
| 17 | 洪武通宝 | 20.55 | 20.58 | 16.63 | 17.29 | 6.73 | 6.71 | 丸 | 0.85 | 0.74 | 0.66 | 0.64 | 2.25 |
| 18 | 洪武通宝 | 20.48 | 20.28 | 18.27 | 17.24 | 6.54 | 6.42 | 圓丸 | 0.37 | 0.44 | 0.46 | 0.67 | 1.41 |
| 19 | 洪武通宝 | 20.46 | 20.52 | 18.25 | 17.91 | 7.56 | 7.65 | 四角 | 0.05 | 0.22 | 0.35 | 0.18 | 1.10 |
| 20 | 洪武通宝 | 20.40 | 20.35 | 17.10 | 17.18 | 7.09 | 7.01 | 丸 | 0.10 | 0.15 | 0.26 | 0.24 | 1.23 |
| 24 | 21 洪武通宝 | 20.36 | 20.19 | 17.54 | 17.36 | 6.07 | 6.17 | 四角 | 0.45 | 0.51 | 0.56 | 0.49 | 1.74 |
| 22 | 洪武通宝 | 20.36 | 20.35 | 17.57 | 17.84 | 6.57 | 6.54 | 丸 | 0.60 | 0.48 | 0.57 | 0.47 | 1.65 |
| 23 | 洪武通宝 | 20.29 | 20.11 | 17.85 | 17.73 | 7.42 | 7.49 | 丸 | 0.38 | 0.42 | 0.27 | 0.30 | 1.35 |
| 24 | 洪武通宝 | 20.18 | 19.88 | 18.55 | 17.67 | 8.67 | 7.47 | 不整形 | 0.15 | 0.14 | 0.34 | 0.34 | 0.86 |
| 25 | 洪武通宝 | 20.07 | 19.95 | — | — | 7.42 | 7.46 | 圓丸 | 0.32 | 0.13 | 0.18 | 0.28 | 1.34 |
| 26 | 洪武通宝 | 19.96 | 19.73 | 17.11 | 17.77 | 7.47 | 7.33 | 圓丸 | 0.07 | 0.10 | 0.13 | 0.17 | 0.95 |
| 27 | 洪武通宝 | 19.89 | 19.88 | 17.22 | 18.50 | 7.10 | 7.40 | 圓丸 | 0.12 | 0.27 | 0.17 | 0.11 | 0.80 |
| 28 | 洪武通宝 | 19.78 | 19.99 | 17.10 | 17.73 | 6.63 | 6.96 | 四角 | 0.45 | 0.37 | 0.31 | 0.44 | 1.59 |
| 29 | 洪武通宝 | 19.74 | 19.93 | 17.90 | 18.38 | 7.56 | 7.16 | 四角 | 0.10 | 0.01 | 0.11 | 0.20 | 0.63 |
| 30 | 洪武通宝 | 19.50 | 19.48 | 17.24 | 16.02 | 8.03 | 8.45 | 丸 | 0.28 | 0.46 | 0.36 | 0.36 | 1.16 |
| 31 | 洪武通宝 | 19.47 | 19.57 | 17.74 | 17.77 | 7.95 | 8.31 | 圓丸 | 0.07 | 0.01 | 0.01 | 0.05 | 0.70 |
| 32 | 洪武通宝 | 19.32 | 19.66 | 17.82 | 16.84 | 7.00 | 7.23 | 四角 | 0.23 | 0.26 | 0.27 | 0.25 | 0.74 |
| 33 | 無文 | 19.42 | 18.92 | 15.34 | 14.96 | 7.66 | 6.85 | 四角 | 0.42 | 0.35 | 0.34 | 0.37 | 1.35 |
| 34 | 無文 | 18.55 | 18.58 | — | — | 8.17 | 8.34 | 四角 | 0.37 | 0.20 | 0.31 | 0.36 | 1.06 |
| 35 | 無文 | 18.48 | 18.74 | 15.75 | 16.50 | 7.55 | 7.31 | 四内 | 0.07 | 0.18 | 0.08 | 0.03 | 0.70 |



錢貨の測定位置

第5表 陶磁器 集計表

| | 石器み透鏡 SS620 | 角 SG625 | その他 | 計 | 時期 |
|-----------------|----------------|------------|-----|---|---------------|
| 船尾窓系 義和窓 I 型 | 3 | | | 3 | 大室の初期 |
| 船尾窓系 義和窓 II b 型 | | 1 | | 1 | 大室の中期 |
| 船尾窓系 舟頭窓 | 1 | | | 1 | |
| 阿波窓系 舟頭窓 I 型 | 1 | | 1 | 2 | 大室の中期 |
| 中国江戸窓 IV 型 | 1 | | | 1 | 大室の中期 |
| 中国 口縁窓 V 型 | | 1 | | 1 | 大室の中期 |
| 中国 口縁窓 VI 型 | | 1 | | 1 | 大室の中期 |
| 中国江戸窓 V | 1 | | | 1 | 11世紀後半～12世紀前半 |
| 舟形 細型 | | | 1 | 1 | 16世紀後半～17世紀初 |
| 中国唐物 | | | 1 | 1 | 大室のC期 |
| 新羅土窓 池青沙器 小皿 | | 1 | | 1 | |
| 福井 窓 | 1 | | | 1 | |
| 福井 窓林 VA | 1 | | | 1 | 16世紀前半～16世紀後半 |
| 福井 窓林 VB | | | 1 | 1 | 16世紀後半 |
| 十輪窓 窓? | 1 | 1 | | 2 | |
| 瓦質土器 | 2 | | | 2 | |
| 笠置系 鋼器 窓 | 6 | | | 6 | 12世紀～14世紀 |
| 手明 窓林 | | | 1 | 1 | |

第4章 自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

出雲大社境内遺跡は、島根県中央部、出雲市大社町杵築東に位置する遺跡である。

本章（報告）は3節で構成しており、第1節では検出された遺構などの時期推定と、遺跡内及び周辺地域での古植生等古環境推定の目的で実施した花粉分析について述べた。第2節では、遺構（SX620）の造られた時期を明らかにする目的で実施したAMS年代測定について述べた。第3節では、柱材及び祈禱札の樹種同定結果について述べた。

また、本章で用いた平面図、断面図は、出雲市（市民文化部文化財課）より御提供を受けた原図をもとに作成した。

第1節 花粉分析

1. 分析試料について

調査区平面図（第32図）に試料採取地点を示すと共に、断面図あるいは模式柱状図（第33図）中に、試料採取位置を示す。

2. 分析方法

（1）微化石概査方法

花粉分析用ブレバート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を、5段階で示した。

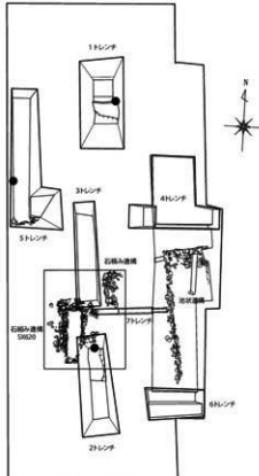
（2）花粉分析方法

渡辺（2010a）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

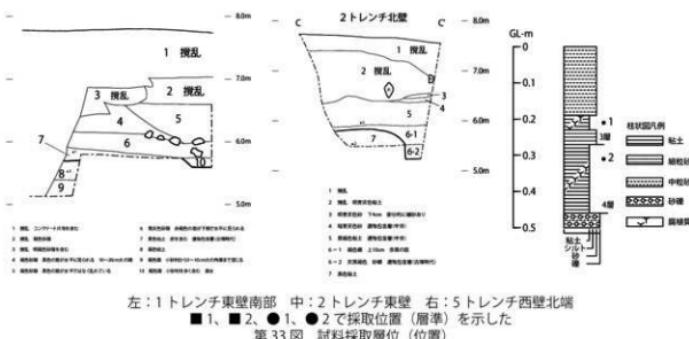
3. 分析結果

（1）微化石概査結果

微化石概査結果を第6表に示す。1トレンチ、2トレンチでは炭片、植物珪酸体の含有量が多かったが、花粉（胞子）、植物片、珪藻の含有量は少なかった。一方、5トレンチでは花（胞子）、珪藻の含有量が多く、炭片、植物珪酸体の含有量が少なかった。



第32図 トレンチ配置図（試料採取地点）



第33図 試料採取層位(位置)

(2) 花粉分析結果

分析結果を第34～36図の花粉ダイアグラムと第7表の花粉組成表に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率(百分率の算出には、木本花粉总数を基準にしている)を、スペクトルで表している(木本(針葉樹)は黒、木本(広葉樹)は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した)。また、木本花粉化石検出量が25粒に満たない試料では、検出できた種類を「*」で示した。分類群ごとのグラフの右側には「木本(針葉樹)」「木本(広葉樹)」「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示したほか、「木本」「草本・藤本」「胞子」「花粉・胞子(全ての合計)」ごとに含有量(温潤試料1g中の粒数)の変化を示している。

得られた花粉化石群集の特徴を、地点ごとに示す。花粉化石群集の変遷を明らかにするために、下位から上位に向かって記した。

① 1 トレンチ

2試料とも花粉・胞子化石含有量が100粒/gと少なかった。

木本花粉では、マツ属(複維管束亜属)が最も多く(2粒: 試料No.2)検出され、スギ属が両試料で検出できた。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)が両試料で検出できた。

花粉・胞子化石の含有量が少なかった原因として、微化石概査結果で炭片、植物珪酸体の含有量が

第6表 微化石概査結果

| 地点 | 試料No. | 花 粉 | 炭 | 植物片 | 珪 藻 | 火山ガラス | 植物珪酸体 |
|-------|-------|-----|----|-----|-----|-------|-------|
| 1トレンチ | 1 | △× | ○ | △× | △ | ○ | ○ |
| | 2 | △× | ○ | △× | × | ○ | ○ |
| 2トレンチ | 1 | △ | ○ | △× | ○ | ○ | ○ |
| | 2 | △× | ○ | △× | × | ○ | ○ |
| 5トレンチ | 1 | ○ | △× | ○ | ○ | △ | △ |
| | 2 | ○ | △× | ○ | ○ | ○ | △ |

凡例 ○: 十分な数量が検出できる ○: 少ないが検出できる △: 非常に少ない

△×: 極めてまれに検出できる ×: 検出できない

多く植物片、珪藻の含有量が少ないとから、グラライ化など堆積後に受けた還元反応により花粉・胞子、植物片、珪藻が溶解した。あるいは、堆積後(あるいは堆積中)に、地表面に露出していたために、紫外線などによって花粉・胞子、植物片、珪藻が溶解したことが想定できる。

② 2トレンチ

2 試料とも花粉・胞子化石含有量が 1000 粒/g 未満とやや少なかった。

微化石概査結果で炭片、植物珪酸体の含有量が多く植物片、珪藻の含有量が少ないと、上下層準にグライト化の影響と見られる「青灰色」の土色認めることから、グライト化による還元反応によって、花粉・胞子、植物片、珪藻が溶解したと考えられる。

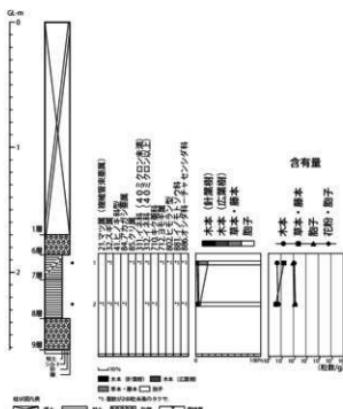
③ 5トレンチ

2 試料ともに数万粒/gと、統計処理に十分な量の花粉・胞子化石含有量があった。また、木本花粉の割合が 90%以上を占める。両試料ともにエノキ属・ムクノキ属が 50%程度以上の高率を示し、マツ属(複維管束亜属)がこれに次ぐ。

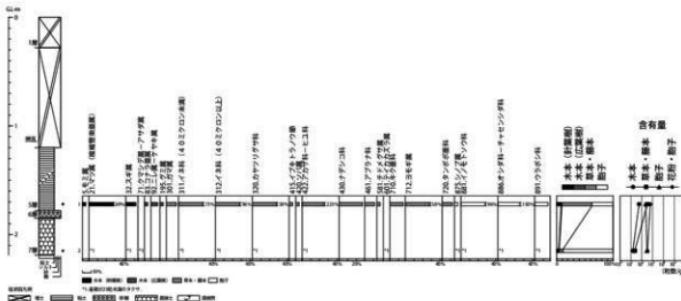
4. 各層の堆積時期の推定と古植生について

出雲大社境内遺跡近辺では、出雲大社境内遺跡近辺のボーリング（渡辺 2004a）、五反配遺跡（渡辺 2004b）等で、花粉分析が実施・報告されてきた。また、出雲大社近辺のボーリングを対象とした分析（渡辺 2004a）では主として縄文時代の、五反配遺跡（渡辺 2004b）では縄文時代晩期以降現代までの堆積物が分析対象とされていた。

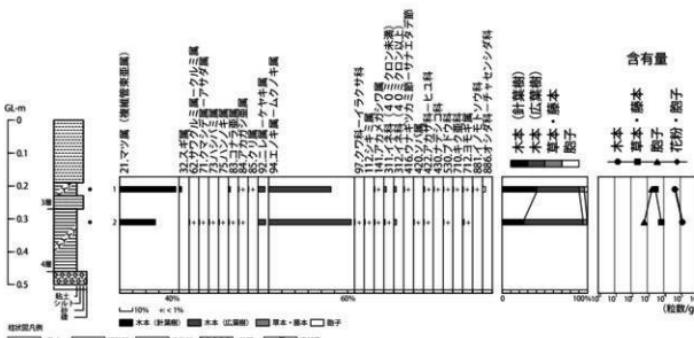
以下ではこれらの結果に基く、花粉層序学に基づき、各層（各地点）の堆積時期を推定する。同時に花粉化石から母植物を推定し、出雲大社境内遺跡近辺での古植生を推定する。



第34図 1トレンチの花粉ダイアグラム



第35図 2トレンチの花粉ダイアグラム



第36図 5 トレンチの花粉ダイアグラム

(1) 1トレンチ

① 推動時期

検出できた主な木本花粉は、スギ属とマツ属（複数管束亞属）であった。これらが特徴的に検出される時期は、五反配遺跡（渡辺 2004b）のⅡ带（古墳時代以降中世）、あるいはⅠ帶とⅡ帶の間（近世頃）、TS03のⅡ帶（時期不明；近世と推定）である。今回の分析では、花粉化石の検出量が少ないとから断定はできないものの、トレンチでの分析層準が古代～近世頃に堆積した可能性が示唆される。

(2) 古植生の推定

検出された木本花粉から、背後の北山（弥山）山地にはアカマツ類を中心としてコナラ類を伴う「薪炭林（里山）」が分布し、素麿川（あるいは吉野川）沿いにはスギが分布した。また、カシ類を要素とする照葉樹林も、北山（弥山）山地（あるいは出雲平野の南部丘陵）に残存していたと考えられる。

第7表 花粉組成表

| 試料番号 | | 1トレンチ | | 2トレンチ | | 3トレンチ | |
|---|----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 |
| 5 <i>Atheros</i> | モミ属 | | | 1 4% | | | |
| 21 <i>Pinus(Diploxylon)</i> | マツ属：複被状束葉属 | | 2 40% | 18 69% | 4 67% | 96 43% | 57 27% |
| 32 <i>Cryptomeria</i> | スギ属 | 1 50% | 1 20% | 3 12% | 1 17% | 4 2% | |
| 41 <i>Cupressaceae type</i> | ヒノキ科型 | | 1 20% | | | | |
| 62 <i>Pterocarya Juglans</i> | サワグルミ属—クルミ属 | | | | | 1 0% | |
| 71 <i>Carpinus Ostrya</i> | クマシテ属—アサガホ属 | | | | 1 17% | 1 0% | |
| 73 <i>Gordonia</i> | ハシバミ属 | | | | | 1 0% | |
| 75 <i>Alnus</i> | ハンノキ属 | | | | | 1 0% | |
| 83 <i>Quercus</i> | コナラ属 | | | 1 4% | | 3 1% | 1 0% |
| 84 <i>Cyclobalanopsis</i> | アカガシ属 | | 1 20% | | | 1 0% | 1 0% |
| 85 <i>Gastano</i> | タリ属 | 1 50% | | | | 1 0% | |
| 92 <i>Ulmus-Zelkova</i> | ニレ属—ケヤキ属 | | | 2 8% | | 12 5% | 12 6% |
| 94 <i>Aphusothe-Celtis</i> | エゾノキ属—ムクノキ属 | | | | | 106 47% | 131 63% |
| 97 <i>Monesse-Urticaceae</i> | クワ科—イクラクサ科 | | | | | 1 0% | |
| 112 <i>Ulmus</i> | シキミ属 | | | | | 1 0% | |
| 141 <i>Malus</i> | アカメガシワ属 | | | | | 1 0% | 1 0% |
| 195 <i>Zizogamus</i> | グミ属 | | | 1 4% | | | |
| 301 <i>Typha</i> | ガマ属 | | | 3 12% | | | |
| 311 <i>Gramineae(40)</i> | イネ科 (40ミクロン未満) | 2 100% | | 19 73% | 2 33% | 4 2% | 2 1% |
| 312 <i>Gramineae(40)</i> | イネ科 (40ミクロン以上) | 2 100% | 2 40% | 25 96% | 3 50% | 4 2% | 4 2% |
| 320 <i>Cyperaceae</i> | カヤツリグサ科 | | | 13 50% | 1 17% | | |
| 415 <i>Ribes</i> | イブロク科 | | | 1 4% | | | |
| 416 <i>Echinocaulon-Persicaria</i> | ウナギボウキ属—ナエタデ属 | | | | | 1 0% | |
| 420 <i>Fagopyrum</i> | ソバ属 | | | 1 4% | | | 1 0% |
| 422 <i>Chenopodiaceae Amaranthaceae</i> | アカザ科—ヒユ科 | | | 58 22% | 2 33% | 2 1% | 1 0% |
| 430 <i>Caryophyllaceae</i> | ナデシコ科 | | | 7 27% | | 1 0% | |
| 461 <i>Cruciferae</i> | アブラナ科 | | | 3 12% | | | |
| 530 <i>Vitaceae</i> | ブドウ科 | | | | | 1 0% | 1 0% |
| 581 <i>Hydrocotyle</i> | チドメリサ属 | | | 1 4% | | | |
| 601 <i>Trachelospermum</i> | ティカカズラ属 | | | | 1 17% | | |
| 710 <i>Carduoideae</i> | キク属 | | 1 20% | 4 15% | | 1 0% | |
| 712 <i>Artemisia</i> | ヨモギ属 | 3 150% | | 15 58% | | 1 0% | 2 1% |
| 720 <i>Cichorioideae</i> | タンポポ属 | | | 3 12% | | | |
| 802 <i>Urostachys sieboldii type</i> | ヒモラン型 | 1 50% | | | | | |
| 875 <i>Oreodita</i> | シノブ属 | | | 1 4% | 1 17% | | |
| 881 <i>Peridiceae</i> | イノモトソウ科 | 15 750% | 48 960% | 25 96% | 33 550% | 1 0% | |
| 886 <i>Aspid.-Aspl.</i> | オシダ科—チャセンシダ科 | 11 550% | 37 740% | 39 150% | 52 867% | 5 2% | |
| 891 <i>Polypondaceae</i> | ウラボシ科 | | | 4 15% | 1 17% | | |
| 898 <i>MONOLATE-TYPE SPORE</i> | 單孔溝孢子 | 7 350% | 13 260% | 24 92% | 24 400% | 1 0% | 1 0% |
| 899 <i>TRILATE-TYPE SPORE</i> | 三孔溝孢子 | 6 300% | 6 120% | 14 54% | 7 117% | 2 1% | |
| 木本花粉总数 | | 2 4% | 5 4% | 26 9% | 6 5% | 224 90% | 209 95% |
| 草本花粉总数 | | 7 14% | 3 3% | 153 53% | 9 7% | 15 6% | 11 5% |
| 孢子总数 | | 40 82% | 104 93% | 107 37% | 118 89% | 9 4% | 1 0% |
| 総数 | | 49 | 112 | 286 | 133 | 248 | 221 |
| 含有量 (粒数/g) | | 118 | 139 | 608 | 336 | 51,713 | 142,346 |

左よりカウント粒数、百分率

(2) 2トレーナー

① 堆積時期

前述のように、1トレーナーに比べやや多いものの、相対的に花粉・胞子化石の検出量は少なかった。検出された主な木本花粉はマツ属(複雑管束亜属)であり、五反配遺跡(渡辺2004b)のⅠ帯(近代から現代)、あるいはⅠ帯とⅡ帯の間(近世頃)、TS03のⅡ帯(時期不明:近世と推定)である。

今回の分析では、花粉化石の検出量が少ないことから断定はできないものの、1トレーナーの分析層準よりやや新しい、近世以降に堆積した可能性が示唆される。

② 古植生の推定

背後の北山(弥山)山地にはアカマツ類を中心としてコナラ類を作う「薪炭林(里山が分布し、素鷺川(あるいは吉野川)沿いには僅かにスギが分布した。

また、調査地近ではイネ科、ソバ、アカザ類(あるいはヒユ類)などが栽培された可能性が高い(ただし、アカザ類(あるいはヒユ類)は、畑作雑草や人里雑草に由来する可能性もある)。

(3) 5トレーナー

① 堆積時期

統計処理に十分な量の木本花粉が検出されたものの、マツ属(複雑管束亜属)とエノキ属・ムクノキ属が多量に検出された事例は、今までになかった。後述のように、エノキ(あるいはムクノキ)が局所的に生育していた可能性もあり、マツ属(複雑管束亜属)が高率を示す時期と捉えることができる。したがって2トレーナーと同様に、五反配遺跡(渡辺2004b)のⅠ帯(近代から現代)、あるいはⅠ帯とⅡ帯の間(近世頃)、TS03のⅡ帯(時期不明:近世と推定)と同時期の植生を示すと考えられる。

② 古植生の推定

エノキ属・ムクノキ属は「河畔林」の要素で、日当たりの良い適度に湿った場所(河川敷など)に生育する。また、扇状地などの谷筋端部に分布する。調査地(出雲大社境内遺跡)は素鷺川(あるいは吉野川)の扇状地端部に立地することから、特に調査地の近くに生育していた可能性が高い。地形的に、エノキ・ムクノキ林を成していた可能性も指摘できる。しかし、従来の結果でこれほど高率を示すことがないから、狭い範囲に生育していた可能性が高い。あるいは単木で生育していた可能性もある。

検出された木本花粉から、背後の北山(弥山)山地にはアカマツ類を中心としてコナラ類を作う「薪炭林(里山)」が分布していた。素鷺川(あるいは吉野川)沿い、あるいは調査地近では前述のエノキ(あるいはムクノキ)が生育していたと考えられる。また、素鷺川(あるいは吉野川)沿いにはスギも生育していたと考えられる。

2トレーナーと異なりイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科・ヒユ科は低率であるが、ソバ属が下位の試料から検出される。このことから、調査地近でソバ栽培が行われていた可能性が指摘できる。

5. まとめ

出雲大社境内遺跡において実施した花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 3地点の分析層準の堆積時期を、花粉層序学の手法を用いて推定した。この結果、1トレーナーは古代～近世頃、2トレーナーは近世以降、5トレーナーは近世以降に堆積したと考えられた。また、2ト

レンチと5トレンチの前後関係は分からぬ。

(2) 各層堆積時期の古植生を推定した。特筆すべき事項は以下の通りである。

- ① 2トレンチ堆積時期には、遺跡近辺でイネ、ソバ、アカザ（あるいはヒユ）類が栽培されていたと考えられる。

② 5トレンチ堆積時期には、遺跡近辺にエノキ・ムクノキ林が分布（あるいは単木で生育）していたと考えられる。また、遺跡近辺でソバが栽培されていた可能性がある。

第2節 AMS 年代測定

1. 測定試料について

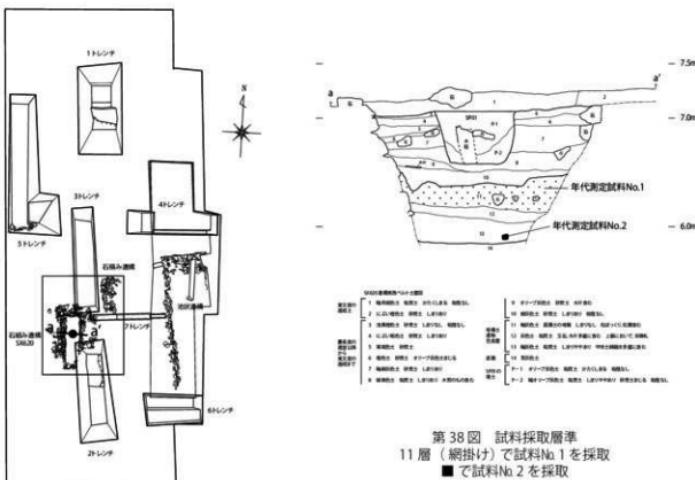
第8表に、年代測定試料一覧に示すと共に、平面位置及び測定試料採取層準を第37・38図に示す。

2. AMS 年代测定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.3 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

3. AMS 年代測定結果

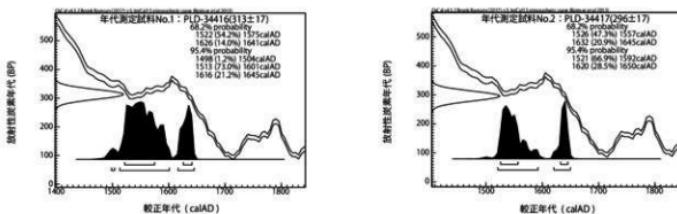
年代測定結果を第39図及び第8表に示す。第39図には、OxCal ver. 4.3 (Ramsey, 2009) による試料ごとの暦年較正図を示した。第8表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。



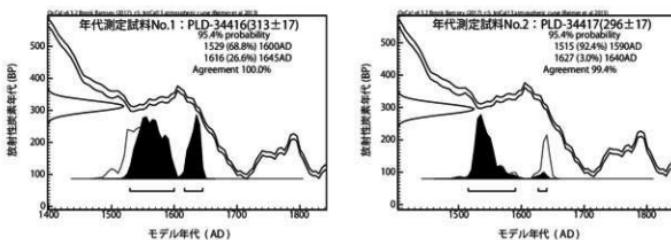
第37図 トレンチ配置図（試料採取地点）

第8表 AMS 年代測定結果

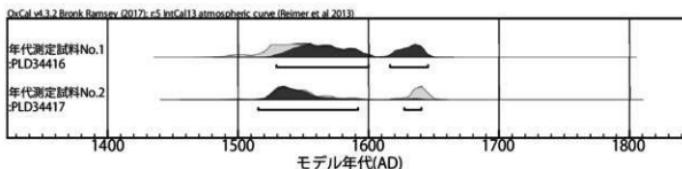
| 試料番号 | 測定部位 (採取位置) | 採取日 | 測定年代 ^a (yrBP ± 1 σ) | $\delta^{14}\text{C}$ (‰) | 算年較正年代 ^b (yrBP ± 1 σ) | 校正年代 ^c (yrBP ± 1 σ) | 想年較正年代 | | 指定番号 (PLD.) | |
|------------------|------------------------------|--------|--|------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|----------|---|--|-------|
| | | | | | | | 1σ範囲内 | 2σ範囲外範囲 | | |
| 1 種別 (マダラ) | SND20-ペルト 海塚セラミック 11 番 | 0.0687 | 相対性測定 同位元素測定：アソシ 大穀泥ナトリウム：1.0% (差異 ± 1.2%) | 411 ± 17 | 30.98 ± 0.28 | 313 ± 17 | 315 ± 15 | AD1522 - 1575 (54.2%) AD1513 - 1603 (72.0%) AD1616 - 1645 (21.2%) | AD1498 - 1594 (1.2%) AD1513 - 1603 (7.0%) | 34416 |
| 2 種別 | SND20-ペルト 海塚セラミック 13 番 | 0.0409 | 相対性測定：アソシ 鉛：1.0% (差異 ± 1.2%) 大穀泥ナトリウム：1.0% (差異 ± 1.2%) | 318 ± 17 | 26.27 ± 0.28 | 296 ± 17 | 295 ± 15 | AD1526 - 1557 (47.3%) AD1632 - 1645 (20.9%) AD1629 - 1639 (29.3%) | AD1521 - 1592 (60.9%) AD1629 - 1639 (29.3%) | 34417 |

^a 1.3 °C 基準較正年代 ^b ± 2.4 °C 想正年代

第39図 历年較正年代の分布



第40図 「Sequential」関数を用いた再計算値



第41図 「Sequential」関数を用いた再計算値の分布

4. 年代測定値について

試料No.1がNo.2の上位に位置し、測定年代値に重なりがあるものの、中央値が逆転していた。測定年代値の逆転を解消する目的で、Oxcal ver. 4.3の「Sequential」関数を用いて、再計算を行った。第40図に個々の再計算年代値、第41図に両試料の分布を示す。

第40・41図に示したように、SX620から採取したマツ属球果(AD1529-1645)と植物片(AD1515-1640)の逆転が解消された。このことからSX620が「16世紀～17世紀前半」に造られ、間もなく埋まっていたと推定できる。

5.まとめ

今回の年代測定によって、遺構SX620は「16世紀～17世紀前半」に造られ、間もなく埋まっていたと推定できる。

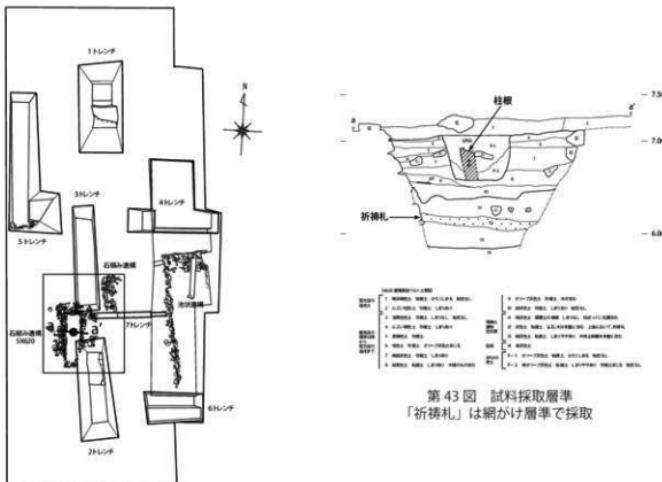
第3節 樹種同定

1. 測定試料について

平面位置及び測定試料採取層準を第42・43図に示す。同定試料の内、「祈禱札」は断面図12層の網掛け層準から採取され、正確な位置は不明である。

2. 樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺(2010b)に従い作成した。作成した永久プレパラートに



第42図 トレンチ配置図（試料採取地点）

第43図 試料採取層準
「祈禱札」は網掛け層準で採取

は整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

3. 樹種同定結果

試料ごとに記載を行い、顕微鏡写真を示した。

(1) マツ属・複維管束亜属 *Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp.

試料名：柱根（W17083102）

記載：仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エビセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は晩材部に分布し、チロソイドが見られる。分野壁孔は窓状であることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

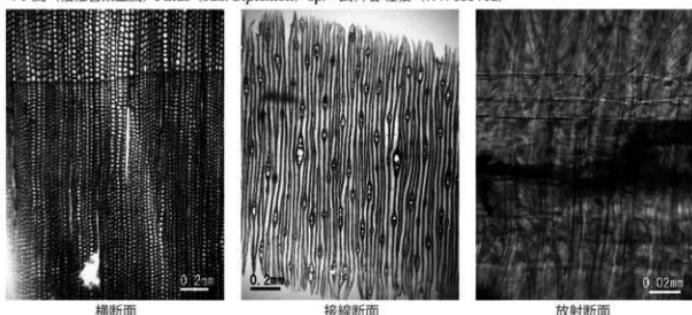
試料名 祈祷札（W17092501）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は全体に分布するが、晩材部の密度が高い。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

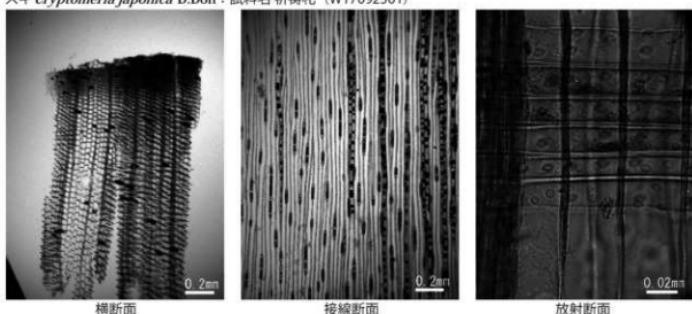
【引用文献】

- Bronk Ramsey, C. (2008). Deposition models for chronological records. Quaternary Science Reviews, 27 (1-2), 42-60.
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 中村 純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13,187-197
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50.000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）『木材の構造』276p 文永堂。
- 渡辺正巳（2004a）「出雲大社近辺の古植生」『出雲大社境内遺跡』379-384 大社町教育委員会
- 渡辺正巳（2004b）「五反配遺跡発掘調査における自然科学分析」『五反配遺跡 古代出雲歴史博物館建設予定地 内埋蔵文化財発掘調査報告書』15-22 島根県教育委員会
- 渡辺正巳（2010a）「花粉分析法」「必携 考古資料の自然科学調査法」174-177 ニュー・サイエンス社 東京。
- 渡辺正巳（2010b）「木質遺物（埋没木）樹種同定」「必携 考古資料の自然科学調査法」194-198 ニュー・サイエンス社、東京。

写真1 樹種同定顕微鏡写真
マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp. : 試料名 柱根 (W17083102)



スギ *Cryptomeria japonica* D.Don : 試料名 祈禱札 (W17092501)



第5章 まとめ

今回の調査は、掘削深度が深かったこと、規模の大きい建物の敷地全体が調査対象地であり、平面調査が可能だったことが、大きな成果に結びついたと思われる。

調査で確認できた遺構の年代は、古墳時代・古代・戦国時代から近世初頭、寛文度・延享度造営以降と、大きく3時期に分けることが出来る。以下、調査成果を時期別にまとめる。

1. 古墳時代・古代

古墳時代・古代の遺構としては、1トレンチで、古墳時代後期の包含層から掘られた東西溝SD622（標高5.72m）、2トレンチで古墳時代の遺物が堆積する南北溝SD623（標高5.76m）を確認した。溝はごく一部の確認にとどまり、自然流路か、人工的な溝なのかは確定できていないが、境内での未調査地区での発見であることから、今後、境内の当該時期の地形を復元する際の参考となる資料を得ることが出来た。

なお、今回の調査地から東へ約50mの拝殿南の調査（景山ほか2004）において、7世紀後半から8世紀前半に機能していたと考えられる東西流路SD02が発見されている。この流路も自然の流路か、人工的な溝のかは確定できていないが、標高が5.67mであり、SD622・623とほぼ同じ標高である。このことから、SD622・623とSD02は、同一地表面にあったものと考えられ、年代も近いと考えられる。

2. 戦国時代から近世初頭

戦国時代から近世初頭の時期のうち、慶長期の洪水砂層以前の遺構として、5トレンチの石列SX624、中央調査区の石組み遺構SX620・柱穴SP626・石積み遺構SX621、東調査区の池SG625を確認した。

過去の調査（景山ほか2004、佐々木2017）では、当該時期の遺構は部分的にしか確認されていないことから、今回まとめて確認できたことは、今後の当該時期の境内を検討するうえで貴重な資料を得ることとなった。

今回、特に注目されるのは、仏教色の強い遺構・遺物が確認できたことである。

まず、池SG625と、その池底から出土した経石があげられる。

SG625は、少なくとも一辺14m以上の方形の池と推定できる。境内において池の存在が想定されるのは、仏教色が強まった時代に建てられていた弁財天の社殿を囲む池である。この社は、天文5(1536)年に建立され、寛文4年(1664)に撤去されたと記録に残る（佐草家文書『大社御造営日記』）。

弁財天は、元はインドの河川の神とされていたが、仏教では弁舌・音楽・学問・智慧を司ると信じられた。民間では伎芸天とみられ、琵琶を持つ天女像が多い。また、財宝の神として、七福神の一つとして信仰されている。このような弁財天は、一般的に水辺に祀られることが多く池の中島に社殿が建てられ、そこに祀られている。江ノ島（神奈川県）・竹生島（滋賀県）・嚴島（広島県）は、日本三大弁天として有名である。

今回確認した池は西側の一部であることから、より東側の池中心部において、中島が存在し、弁財天が祀られていたと推定することができる。

しかし、弁財天を見た場合、池の規模が大きいと思われることや、庭園に見られる州浜があることなどから、単純に弁財天を囲む池とは考えにくい面もある。

また、「(県指定) 紙本着色杵築大社近郷絵図」(北島家蔵) の絵画資料(写真2)と比較すると、弁財天の位置が異なるなど相違点がある。

絵図では、弁財天は境内の西南隅に位置するが、今回確認した場所は、絵図と比較すると東北の方角となり位置が若干異なる。必ずしも絵図が正確な位置を表現しているとは限らないが、注意しなけ

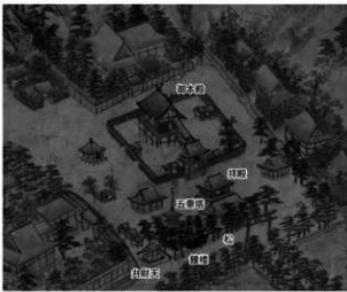
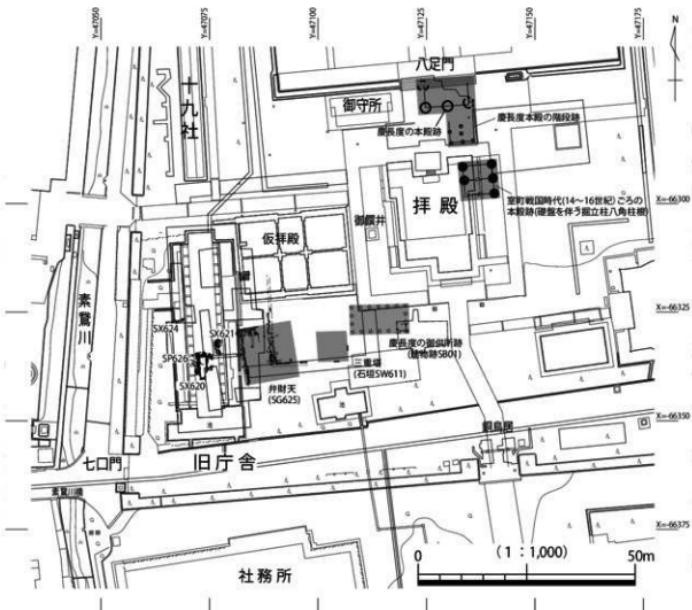
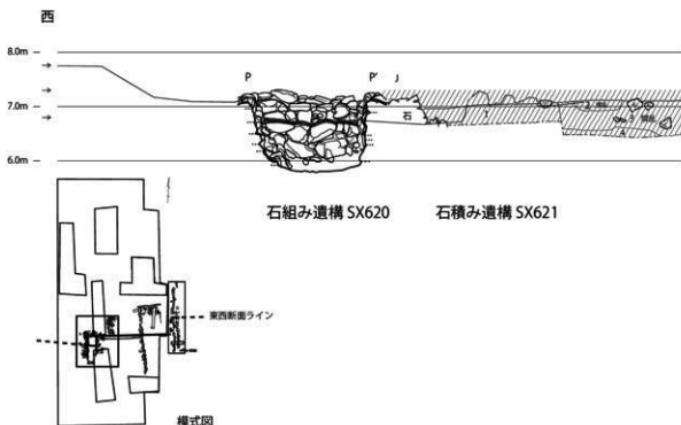


写真2 紙本着色杵築大社近郷絵図(境内部分)(北島家蔵)



第44図 瑞垣南側地区における中世後半期の建物位置推定図



第45図 調査地東西断面図1

ればならないのではないかと考える。

しかし、絵図には西から東へ、弁財天、三重塔と鐘楼、拝殿という順に描かれている。発掘調査によれば、(第44図)三重塔遺構(石垣SW611)と推定される遺構の位置(佐々木2019)は、池(弁財天)より東で確認されていることから、絵図に描かれている基本的な建物配置においては一致している、という見方も可能であり、必ずしも弁財天の位置が異なるとは言い切れないと考える。

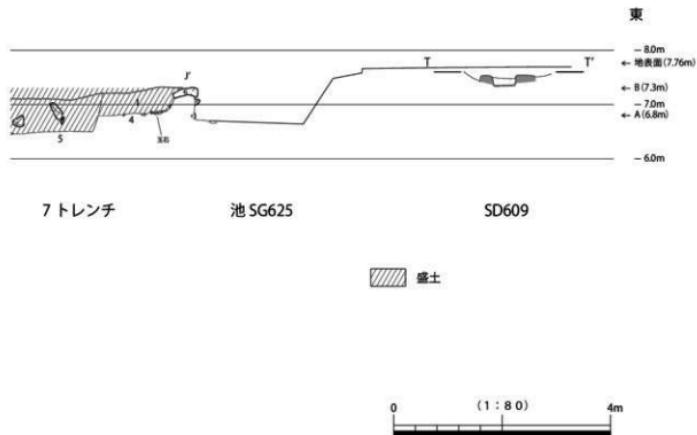
はたしてこの池が弁財天に関わるもので良いのか、過去の調査とも合わせ慎重に検討する必要があると思われる。

経石は、池SG625の州浜から池底にかけて敷かれていた玉石に混じって出土した。この経石は、丸い扁平な石に基本一文字を墨書きした一字一石経である。また、文字の書体の違いから、複数の人の手によるものと判断できる。

次に、石組み遺構SX620及び遺構内から出土した祈祷札と経石があげられる。

SX620は、16世紀代に境内から排水した雨水をためる溜槽と推定する。遺構の底には、松葉や松かさ(松ぼっくり)が大量に腐植土となり堆積していることから、これらは、遺構周辺に松が生えていたことによると思われ、遺構は地上に開口していたと推定する。このことは、花粉分析(第4章)の結果からも推察される。また、「(県指定)紙本着色杵築大社近郷絵図」(北島家蔵)(写真2)に、境内の南から西南にかけて松が描かれていることも参考とすることが出来る。

腐植土は、AMS年代測定(第4章)によれば、16世紀~17世紀前半の年代がえられているが、ここから出土する遺物は、12世紀から14世紀と、16世紀以降の2時期に大きく分けられる。12世紀



第 46 図 調査地東西断面図 2

から 14 世紀の遺物は、いずれも完形品がなく小片であることから、16 世紀代に、たとえば周辺で何かの工事があり、地面を掘削した際に出土した物を投棄したのではないかと想像する。一方、16 世紀の遺物のうち、銭貨・経石などは、あえてここに投げ入れたのではないかと推定する。

祈禱札は、文字の残りが大変悪いため判読しにくく、年号は確認出来なかった。しかし、不動明王や大般若經を思わせる文字が書かれていたことから、仏教色が強かった時代、大永 4 年（1524）に建てられた大日堂との関連を想定させるものである。大日堂が機能していた時期（寛文 4 年（1664）に撤去）に関わる、何らかの儀式等に関係する遺物ではないかと考える。

経石は、池 SG625 から出土した経石と同様であろう。

当該時期の遺構の前後関係について、寛文度の造成土の下には、慶長期の洪水砂層があり、この砂層の下に慶長度の遺構が存在する。今回発見された遺構のうち、特に中央調査区の石組み遺構 SX620・石積み遺構 SX621、東調査区の池 SG625 について、前後関係を検討したい。

第 45・46 図の調査地東西断面図を見ると、SG625 の池底（6.78m）・SX621 の下端（6.84m）・SX620 の横目地（6.77m）が通る場所の標高が、ほぼ同じ 6.8m 前後である。（矢印 A）

また、SG625 の護岸石の上端（7.36m）・SX621 の上端（7.36m）・SX620 の上端（7.31m）の標高も、ほぼ同じ 7.3m 前後である。（矢印 B）

のことから、ある時期の地表面は標高 6.8m 前後であり、その時点ではすでに SX620 と SX621 は機能していたと考える。その後、池 SG625 を作る必要から、地表面を掘削するのではなく、地表面を池底にし、その上に護岸石を積み上る方法で池を作ったと推定する。

この方法では、護岸石の高さまで盛土することになるが、そのため、地表面が高くなり、西側のSX620・621が埋まることになる。そこで、SX620は嵩上げし対応したと考えられる。その結果が、石組みに残る横目地より上部ではないかと推定する。しかし、SX621は、何らかの理由で不要と判断され、盛り土で埋められたのではないだろうか。

3. 寛文度・延享度造営以降

寛文度の遺構面は、建物基礎工事や各種工事等により削平、搅乱を受けていたため確認できなかつた。しかし、寛文度の次の遷宮である延享度の遷宮に関係する遺構を確認した。遺構は、東調査区東で延享度の庁舎に伴う石組水路 SD609 である。

SD609は、従来の調査において東面・南面と西面の一部が確認されていた。今回、西面の石組水路については、既に確認されている水路より、さらに北側にも良好な状態で残されていることが明らかとなった。

以上、今回の調査成果を3時期にまとめた。

平成の大遷宮の事業として庁舎建て替え工事が計画され、それに伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。出雲大社境内の地下には、古代から今日まで、繰り返されてきた遷宮をはじめ境内利用の変遷を示す資料が、今なお良好な状態で眠っていることが明らかとなった。

今回、限られた条件のもとのでの調査であったが、想像以上の成果を得ることが出来た。十分な検証には至っていないが、本報告が、今後の研究資料の一つとなることを願い、研究の深化を期待する。

【参考文献】

- 景山真二ほか 2004『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会
- 佐々木歩美 2017『平成28年度出雲市文化財調査報告書　出雲大社境内遺跡』出雲市の文化財報告 36 出雲市教育委員会
- 千家和比古 1996『出雲大社の、いわゆる神仏習合を伝える絵図の検討』『古代文化研究』第4号島根県古代文化センター
- 曾田辰雄 2013『第Ⅲ部 発掘調査』『国宝出雲大社本殿ほか22棟防災施設工事報告書』宗教法人出雲大社
- 島根県古代文化センター 2013『出雲大社の寛文造営について—大社御造営日記の研究—』島根県古代文化センター調査研究報告書 48
- 八鹿町教育委員会 1997『名草神社三重塔と出雲大社』八鹿町ふるさとシリーズ第10集

図 版



庁舎解体後の調査地 全景（南西から）



1トレンチ東壁土層・溝状遺構 SD622（北西から）

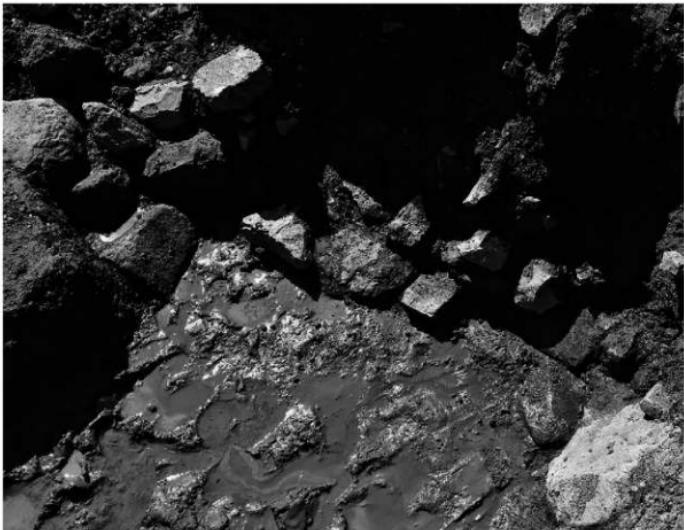
図版2 第2・4トレンチの調査



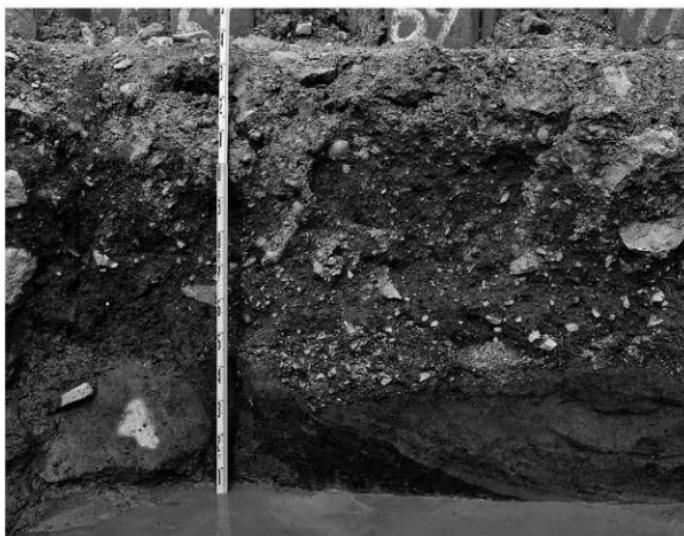
2トレンチ東壁土層・溝状遺構 SD623（南西から）



4トレンチ南壁土層（北から）



5 トレンチ・石列 SX624 (北西から)



5 トレンチ西壁土層・石列 SX624 (東から)

図版4 石組み遺構 SX620・石積み遺構 SX621の調査



石組み遺構 SX620・石積み遺構 SX621 全景（オルソ画像）



石組み遺構 SX620 全景（南から）

図版6 石組み遺構 SX620の調査



SX620 北壁（南から）



SX620 西壁（東から）



SX620 東壁（西から）



SX620 南壁（北から）

図版8 石組み遺構 SX620の調査



SX620 北西角（南東から）



SX620 北東角（南西から）



SX620 東西ベルト土層（南から）



SX620 遺物出土状況（錢貨・経石）



石積み遺構 SX621 全景（北西から）

図版 10 池 SG625 の調査



池 SG625 全景（南から）



石組水路 SD609 全景（南から）

図版 12 池 SG625 の調査



池 SG625 全景（北から）



SG625 全景（北東から）



SG625 北側護岸（北西から）

図版 14 池 SG625 の調査



SG625 洲浜（南東から）



SG625 南北ベルト西側土層（南西から）



7 トレンチ東側・SG625 西側護岸石裏側（南から）



中央調査区・東調査区 調査終了後 全景（南西から）

图版 16 出土遗物 1



全形 (1 : 2)



祈祷札



報告書抄録

| ふりがな | へいせいにじゅうきゅうねndo izeoshi bunka zaichou sahō koku sho | | | | | | | |
|-------------------------------------|---|-------|--------------------|----------------------------|------------|------------------------|--------------------|--------|
| 書名 | 平成29年度 出雲市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 出雲大社境内遺跡2 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 出雲市の文化財報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 37 | | | | | | | |
| 編著者名 | 原俊二(編), 佐々木歩美, 渡邊正巳 | | | | | | | |
| 編集機関 | 出雲市市民文化部文化財課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒693-0011 島根県出雲市大津町2760 TEL (0853) 21-6893 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成30年(2018)3月 | | | | | | | |
| 所取遺跡 | 所在地 | コード | | 北 緯 | 東 経 | 調査期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いぜもおゆうしろれいだい 出雲大社境内 いせき 遺跡 | しまねけんいぜもしろたいしゃちょう 島根県出雲市大社町 おとぎわらし 杵築東 195 | 32203 | Z 3 (遺跡番号) | 35°24'07" | 132°41'07" | 2016.10 ～ 2017.6 | 285 m ² | 庁舎建設工事 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 出雲大社境内 遺跡 | 社寺跡 | 中世後期 | 石組み遺構 石組水路 池 | 中世土師器, 陶磁器, 銭貨, 折被札, 経石 | | | | |

出雲市の文化財報告 37

平成 29 年度 出雲市文化財調査報告書

出雲大社境内遺跡 2

平成 30 年 (2018) 3 月

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760
TEL (0853) 21 - 6893

発 行 出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70
TEL (0853) 21 - 6874

印 刷・製 本 島根印刷株式会社